sky blood

蝉蛾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｋｙ ｂｌｏｏｄ

【Ｎコード】
Ｎ２８４５Ｚ

【作者名】
蝉蛾

【あらすじ】
“ラズウェル”と名乗る謎のテロ組織によって、壊滅させられた東京。その手段は元ＫＧＢ将校から奪った生物兵器であった。
画一化を図り、統合していく暴力組織。崩壊していく地方の都市機能。
そんな日本で繰り広げられる陰謀劇。

目録１（前書き）

初投稿です。温かい目でどうか見てください。自分でもこの小説のジャンルは何なのだろうと非常に悩んでおります。

目録1

発生

――――東京。
全国各地のテレビに唐突に現れた景色はソレだった。
朝の天気予報時の前フリでもおなじみの東京の俯瞰風景。
ヘリで撮られたと思われる東京タワーを中心としたビル街。
何も変わらない、いつもの風景だった。
ただ、不可解な事象が二つ。
――――まず一つ。全国所構わず各地にその風景が現れたこと。
アニメを見ていた家庭から、映画の再放送をみていた家庭まで、その風景に置き換わったことだ。
放送事故かーーーーこの時点ではテレビの前でくだを巻いていた連中はそう判断したであろう。
――――そして、
その風景には足りないものがあった。
その風景の下を這いずり回る黒。
――――ようするに人だ。
天気予報の時に、まばらにだが見えるであろう。天気予報を報じる女子アナウンサーの嘘くさい笑顔と共に垂れ流されるヘリから見た東京の風景。
その中にあったであろう、道路を歩く人の存在がいなくなっていたのだ。
――――だが。
――――だが、ただ人がいない、というだけなら大して違和感もなくこの映像を見ることが出来ただろう。
――――が、
二つ目の異常が、一つ目の異常を嫌にでも意識させる。

――――その人が這いずり回っているはずの道路は全部ドス黒かった。
その黒は、
――――知れたこと。血が変色し、黒くなってしまったモノたち。
それが道路を染め上げている原因だと理解すると、全国で断続的に悲鳴が巻き起こる。
この風景内の人間全員が赤い血だまりに浮かんだ肉塊と化していることは決定事項だった。
が、それを理解できない連中はというと、
混乱していた。
理解が出来なかった。
ありえない。
だってそうだろう？架空の世界のお話を垂れ流す際にも流血沙汰はテレビじゃ抑えられている。演出だろうが何だろうがマスゴミ世界の中であろうとも血はＮＧだ。
だがーーーー
それが演出であるとかいうバカげた夢は強制的に覚まされることになる。
画面が切り替わる。
「こんにちは！」
出てきたのはどこぞのスプラッター映画よろしくーーーーというか明らかにそれを狙ったであろうホッケーマスクをかぶった男が、信じられないほど生理的嫌悪を促すダニ声を全国ネットで撒き散らしていた。
「どうですかどうですかどうですかどうですかぁぁぁぁぁぁぁぁ！いやぁすばらしいでしょうすばらしいでしょう。もうやばいっす俺ホントにテンションあがってきたぜーーーーーーーーーーーーぇぇぇぇぇ！」
切り替え切り替え切り替え。ダニ声をバックグラウンドミュージックに画面が２秒ごとに切り替わる。

――――ネズミに食い荒らされる地下鉄の人間の死体。
――――蜂の巣状と化したロシア人。
――――血だまりと死体まみれの渋谷。
形容する言葉は血の池地獄絵図。
「どーーーですかぁ！ぎゃはははははは！さっきちょろっと出てきやがったロシア人のジジイがいただろう？あのジジイの置き土産だよ東京をこんなにしたのはさぁ。
このジジイがさ、旧ソ連で開発していた生物兵器を占有していてな！こっちが有効活用してやったのさ。元チェーカー崩れだったみたいでな、粛清対象にまで上がっていたらしいがこれのおかげで助かっていたみたいだ」
そういうと、凶暴な笑みの中に皮肉気な冷笑の色も含めながら叫ぶ。
「凄いよなぁ、あの国。本当に尊敬するよ。チェルノブイリ然り今回然り。なんつうか史上最強の功利主義国だよねあそこ。あのアンクル・サムでさえ、他国の人間の命だったら平気で換金できるけど、自国民の首に不発弾仕掛けてでも利益をとることはしないよ。いや、マジで凄いよ」
さて、と言った。
声音が変わった。
透き通るかのような澄んだ女の声に変わる。
画像はホッケーマスクのまま。
「――――我々はここ、東京を僭越ながら占拠させていただいております。
そして、ここーーーー東京をアップグレードする技術も手に入れました」
恭しくそう切り出した女の声は、まだ続く。
「ここを軍隊を使って取り返そうなどと思われないほうがよろしいかと思われますが――――――――――
――――五臓六腑が激しくシェイクされる感覚を味わいたいならそれもよろしいかと。

我々のことならご心配なさらないで下さい。
ワクチンは我々の手ですでに開発済みで御座いますゆえーーーーーーーーーーーーーーーーーー」
さて、と言い。
「我々は確たる目的はありますが、日本を占拠しようなどという野望を持っているわけではありません。ただ、東京は我々の最終目標の道具にすぎないのですから」
そしてーーーー
最後は、幾重にも声が重なった無機質な声で幕が閉じる。
――――日本終焉への。
「僭越ながら最後に、我々の組織、いえ我々が創られた際の名称というより――――――――――――――――――――そうですね、商品名といったほうが分かりやすいですか。それは――――――――――――」
一度咳払いをし、その商品名を答えた。
「ラズウェル。賀北会後期不浄人連盟ラズウェルです。よろしくお願いいたします」

ザイール＝アルマージ視点より　暴力監視協会員との邂逅

なんだってんだ。俺の人生
わが祖国のケチのつき始めは無論偉そうに大陸でふんぞり返っているアメリカという名の戦争と金儲けの違いも見い出すことが出来ないらしい腐りきった低俗主義者の屑共が、湾岸戦争終結時にわが祖

国に対し、軍を作らないよう強制しだしてからだ。自分は世界の警察を気取っているくせに全くふざけた話があったもんだ。
祖国の治安悪化を嘆く声が世界中にあるが、ここまでテロ組織が肥大化したのも、それを食い止める軍も警察もなくなったからだ。その上でそうして受けた“テロ”という結果から、国の意見も聞かず“これはテロとの戦争だ”と喚き散らす。テロとの戦争を題しているにもかかわらず何の罪もない民衆ごとすべてを焼き払った。いったいアメリカの地ででかいビルにふんぞり返っている死の商人共はこの“正義”のための戦争でどれだけ儲けたか分かったもんじゃない。
――――まあ、本当に現在テロ組織に捕えられている私がこんなことを思うのはアレだとは思うが。
そう。私は共にアッラーに忠誠を誓った同胞に捕えられているのだ。猿ぐつわと手錠までかけられて。
どうやら私が捕えられている理由は、アメリカの連中への態度を決めきれない政府の連中に発破をかけるためであろう。つまり私は人質で、奴らは交換条件に自分たちの行動に制限を設けるなとでも言うつもりだろう。
よって、この場所は誰にも知られてはならないだろうから、神経を尖らせ、絶対にばれない場所を選び、交渉を粛々と続けているだろう。だから、第三勢力によっての救出は、期待するだけ無駄であろう。
――――が。
だがここ10分ほど何かと騒がしい。
――――米軍の連中？
そう思ったが、違ったようだ。
外から連続した発砲音が聞こえ、重いものが倒れるドォ――――という音がこっちまで聞こえてきた。
そして、独房の扉を開いたのは。
――――5人一組の黒ずくめの男達だった。

黒のトレンチコートを着込み、Ｈ＆Ｋ　ＸＭ８アサルトライフルを持った彼らは無線に報告を入れる。
「マスター。人質の保護、終わりました」
彼らは機敏に、だが軍人特有の形式張った動きもなく、俺に話しかける。
「ザイール＝アルマージか？」
すでにその謎の集団には人質の存在も関知しているらしい。ならば米ではないだろう。あの美国人共が薄汚いアジアンの人質などそこらの虫ケラにも劣る命としか考えていないだろうから関知などしようともせずテロリストごと爆破して始末しているだろうからな。
「あんた方は？」
「国際戦線部隊エイミー・ソルジャーズ連盟特務会員倉峰遥斗直属部隊“灰狼衆”だ。長いよなあ」
エイミー・ソルジャーズ連盟！噂には聞いていたが実在したのか――――――――――――――――――――――――――――――――――――。
戦場での罰則規定である国際法。その法の執行部隊が出来上がったと噂には聞いていた。
だが、所詮すぐ潰されるものだと思っていたが、まさかまだ活動を続けていたとは。
この５人を見ればわかる。傭兵の趣を残していながらも行動に迷いもなく練度と統率力も特殊部隊にも引けを取らない。なるほど。世界の軍にケンカ売るだけのことはある。
そのまま俺を連れて俺が捕えられていた部屋がある場所の階段を駆け下りる。
そして、その５人のうち一人が駆け下りた階の砦の非常口の扉を蹴破ると、あとの４人が一斉に銃口を構える。
――――アホ面下げて突っ立ていた連中が蜂の巣になるのが２秒。
そこからさらにどうしたと喚きながら隣の部屋から飛び出てきた連中を手榴弾で火葬するのに１秒。敵がいなくなったのを確認して弾倉切り替えをするのに３秒。１０秒もかからない顛末だった。

ついさっきまで火葬場となっていた隣部屋に迷わず入ると、そこの鉄格子を外す。
「高度は――――――――――――13メートルといったところか。まあ、いけるだろう」
なんて声が聞こえてきた。一体何の話だ。
「おいあんた、おぶされ。ここから飛び降りる」
いつから軍人の仕事が映画のスタントマンの仕事に切り替わったのか説明してくれ、と叫びそうになっていた俺を無理やり担ぐ。
不摂生のせいでぶくぶくの脂肪の塊を持ち、90キロはある私の体を平気で担ぎ、高度13メートルからの飛び降りを実行した。
ダン！
飛び降りた衝撃をうまく地面に受け流したのだろう。地面が派手に割れているが、当の本人たちは平気な顔をしている。
――――だが。
「終わりだ。残念だがザイール君。君の命はアッラーの前に棺で捧げられることになる」
図られていたのだろう。絶妙なタイミングでテロリストの包囲は完成していた。
砦からの狙撃手もちらほら見える。
――――終わりか。ざっと目にしただけで数百人規模で包囲している。
だが黒ずくめはいまだ涼しい表情を崩していない。
「ザイールさん。
――――これから“灰狼衆”の代名詞、見せてやるよ」
そういうと、両手を上げる。
――――まあ、常識的に言えば、降服のサイン。
「結構だ。そりゃあここでドンパチやるより略式法作って頭ぶち抜かれる方がまだマシだろうよ」
「いや――――――――――――――――――――――――」
瞬間、

「アホ面さげて罠にかかったのは手前等だよ
ケツの底までできっちりな！。
――――鉄雨を降らせ！」
――――一帯には“雨”が降り注いだ。
それは全方位から黒ずくめだけを避けるように横殴りの雨を演出し、
それによって飛び散った血漿が辺り一面を紅色に変貌させる。
――――一瞬だった。
数百ものテロリストの命をこの２秒で、脳漿と共に吹き飛ばし薙ぎ倒し蹂躙した。
残っていたのは、一面の紅い紅い肉塊畑。
「これが、“灰狼衆”の誇る“鉄雨”。
アーマー着込んだ連中ならフルメタル弾の強雨に変わるし、車両相手なら５０口径弾の大粒の雨になる。
――――酷いものだね」
――――俺はただ愕然とするほかなかった。
そのまま無線に報告を入れる黒ずくめ。
「マスター。片が付きました」

倉峰遥斗視点より　結果報告。

最近のテロリストも質が落ちたかね。自分で鉄の暴風雨に突っ込んでくるとはな。ま、楽な仕事だったな。今回は。さて――――――と。
この仕事はとてもスムーズに終わった。人質も無事救出したうえにその組織に関係しているデータまで手に入ったので、特別ボーナスの期待を胸に報告すると俺はリーダーのクソ爺からまたとんでもない“仕事”を任されることとなった。
「日本に、行け、だぁ？」

俺は精一杯の侮蔑を込めてそう呟き、精一杯の不満を込めて、ジジイの耳にこう語りかける。“くたばれ”と。
「ライオス爺さん？一つ聞いてもいいか？俺は殉教者でもなければイカレてもいない。
ただの傭兵だ。何を好き好んであんなゴミの掃き溜めのクソ漁りにいかなきゃならない。
いつから暴力監視協会から慈善ボランティア団体に転職したのか、説明してくれないか」
その命令は地雷原に裸で突貫して自分の身を犠牲にして地雷処理を行え、という命令と全く同質のものだ。このジジイはそうまでしても自分がくたばる前に一人でも多くの天国への道連れが欲しいのであろうか。
「手前の耳は、間違いなく手前の言うクソの沈澱部位か、慈善家の安穏とした祈りの声でもつまりにつまって同類のゴミが含んだ情報しか入らないブタの耳にでもなってんだろうよ。よかったな。家畜でもブタはお前ほどうるさくはない」
――――糞ジジイ。耄碌しても舌先だけは衰えはしねえ。
今、俺と会話らしきことをしているこのくたばり損ないはライオス・ネミアースという名前だ。人生の大半を過ごした米軍での生活はこのジジイの偏屈さを増長させただけだったらしい。
このジジイはベトナム還りの名も無き敗残兵であり、アメリカという狂った戦争中毒国の被害者でもある。
――――このジジイの息子は親子共々ベトコンの山林部隊共と丁々発止の愉快な銃撃戦を繰り広げている途中で悪夢の薬剤、枯葉剤を撒き散らされ、血を吐いて出来の悪い喜劇役者の如く踊りながら死んでいった。
その喜劇のような悲劇を演出した息子を見たジジイの心中はまさに蛇蝎の如き祖国への憎悪に溢れていたであろう。
そして息子の死亡通知を見たジジイの妻はこれまた喜劇の如き顔芸を演出し、声にならぬ悲鳴を上げ、そのままハンマーを数秒か振り

回した後、手元が狂い自分の頭を砕いて死亡。最後は喜劇からコントに転換したようだ。
――――――生命保険会社もこの女の死因、“ハンマーの取り扱い中での事故”を受理するあたり意外と良心的であるらしい。
――――国益にもならぬ戦争の為に祖国の兵をも犠牲にしたアメリカという国に、このジジイは一体何を見、何を思ったのであろうか。
――――それから、3年後。
ジジイは民間軍事会社を買収したのち表向きそのままの民間軍事会社だが――――裏の顔は世界中の傭兵が加入している国際法刑罰執行連盟“エイミー・ソルジャーズ連盟”を設立したのである。
血と硝煙まみれる戦場という名の地獄にも一応の秩序を作り出すことを目的とした暴力監視協会。会員数15万人を超す最凶の傭兵組織。
ただの一兵卒に過ぎなかったこのジジイに、何故これだけの組織を作りだすことができたのかーーーーだれの知るところではない。
――――で、俺は。
「で、どこに糞が詰まってるってクソジジイ。手前は耳の通気口が程よいみたいだが肝心の記憶がすっからかんのまっさらなお脳じゃねえか。まるで脳のしわがそのままその顔面にお引越ししてきたみたいだな。
――――慈善活動以外の目的があるんならばさっさと吐きやがれ。まさかそのことまで忘れたわけではあるまいな。そうだとしたらこの連盟もおしまいだ」
「貴様は顔も脳もほんとまっさらきれいだよ
――――察しはついてるだろう、このクソガキ。のうのうと逃げようとしやがって。
――――今回も同じ“粛清任務”だ」
粛清。よく言ったもんだ。
やはり、このジジイにしても、“我こそが正義”とのたまっているアンクル・サムの遺伝子は、きっちりかっきり残っている。

「ああーーーやっぱり動いたのはあのイカレ集団か。で、あのテレビでおっかなびっくり蜂の巣になってたのはセルゲイのオヤジか。となると依頼者はーーーー」
「わかってると思うが、高山九山だ」
以外な人物だ。正直状況的にも倫理的にもあのイカレ集団の死亡通知に名を連ねているべきであろうに。
「あの防衛省のオヤジなんで生きてるの？東京在住人でしょあの武器マニア」
「おお、聞いて驚け。遂に霞ヶ関の日本のしみったれた官僚も、天下り先のおべっかに大阪指定暴力団にまで手を伸ばし始めたぞ。――――現役官僚が極道との武器取引だよ。堕ちるとこまで堕ちたな。更にその出張のおかげで命が助かったとあっては神様ってのがどれだけアバズレなのかが分かるぜ全く」
「あのおやじのバイタリティーにはいつも驚かされる――――けどな。おいジジイ。早く本題に入れ。今の日本に茶々入れる理由はなんだ。下らねえ理由だったらトーラス・レイジングブルの４４マグナムがあんたの頭にいい通気口を作ってくれるぜ。赤子の手ぐらいだったら軽くぶち抜ける位のやつを、だ」
そういうとさも不満そうに神経質っぽいしゃがれた声で、だが驚くほど大きな声で喚き散らす。まだくたばりそうもねえみたいだね、クソ野郎。
「おい――――クソ峰。お前は当事者だろう
奴等の“創造主”の身元調査の依頼を受けていたのは貴様の“灰狼衆”だっただろう。
――――データの一部を傍受した挙句に貴様今更逃げるつもりか！今更逃げられると思ってるのか、ええ！」
あーあーあーあーはいはいはいはい。その仕事を背景の説明も無しに頼んだのも手前だ。責任転嫁してんじゃねえよクソジジイ。そんな言葉を言いたかったがどうにかこらえる。ジジイの頭ってのは固いばかりか感情の表現方法が大声でがなる以外見つからない位おつ

むの出来が悪いのだ。言ったって無駄である。その耳障りな声をこの世から消去する方法はジジイがくたばるのを待つほかない。
先は長そうだ。
「耳元でがなるなクソジジイ。
――――アレはアレ、コレはコレだ。
わかってるよ、ライオス爺さん。これも通常任務には変わりねえ。ちゃんとやるさ。
――――だけどな、ちゃんと衣食住がそろった場所があるのかと聞いてるんだ。
嫌だぜおい。またベトナム戦争時よろしく山々巡っての野宿生活なんてよ」
「ああ、そっちはぬかりねぇ。てめえの受け入れ先はちゃあーんとある。
――――大阪の知事が恐ろしい切れ者でな、首都壊滅状態を利用して大阪をドブ攫いの町にしやがった。
そいつが設立した大阪治安維持団体、そこにお前は行ってもらう
――――その名は」
ライオスのジジイは声を震わせ言った。きっと笑ってるんだろう。
――――主にそんな怪しいところに行かされる俺の不幸を。
「サファオル。大阪治安維持団体サファオルだ」

ライオス＝ネミアース視点より　人物分析

倉峰遥斗。
この偏屈なクソガキをエイミー・ソルジャーズに招き入れたのは、その能力の高さは無論あったものの、それよりも本当にもの恐ろしい“眼”をしていたからだ。
――――むしろあの能力の高さはその“眼”によるものなのかも知れない。

奴が敵と向かい合う時、その眼に浮かんでいるのは相手への不安と死を煽る死神の眼だった。
――――その眼は、もう既に守るものなど何一つなく、自分の命の抵当価格すらつけていない、空虚な眼だ。
――――守るものがない、と簡単に言うがそれはどういう事なのか、想像してみるがいい。
――――祖国も持たず、ろくでもない環境に生まれ落ちた傭兵の人間ですら、自身の命を守るために硝煙と血漿飛び散る戦場に立っている。
――――だが、倉峰は自身の命にすら何ら価値を見出していない。自分の命にすら執着をなくしてしまった人間の末路なぞ破滅しかない。
――――そう、奴は破滅を願っているんだろう。
奴は今“偏屈で口が悪い仏頂面の凶暴者”という仮面を被れているが、民間軍事会社の一傭兵時代は感情というものが本当に死んでいた。
気だるげな眼と仏頂面を張り付けた黒衣の男。
その表情は死地にあろうと日常にあろうと変わらない。
だが、順応性は高かったようで、エイミー・ソルジャーズのコミュニティーで一番使いやすい仮面を見繕って、上手く被ったのだ。
――――奴は、いつかこの組織を離れるだろう。
これは勘でしかないが、確信に近い勘だと思っている。
――――そもそも奴が傭兵になったのはそこのコミュニティーが金でしか繋がっていない簡潔な関係であったからだ。
その中では仲間意識も信頼関係すらない。感情を交えなくても自身の居場所を創れる。そういった特異性のあるコミュニティーに魅力を感じたのであろう。
ならば、組織が長続きしそれぞれがそれぞれの領域を踏み込んだ付き合いをしようとしたときが――――奴はここから消え去る時だ。
――――奴は人との関係性を持つことを極端に恐れている。

――――同じような境遇の――――――例えば、灰狼衆の連中やカラニハル以外に奴と仲がいい奴を儂は知らない。連中もまた、他者との関係性を拒絶されてきた空虚な連中だったからだ。
だが、違いがあるとすればカラニハルや灰狼衆の連中は最初から人との関わり合いがなかった。だからカラニハルは新たな人間との絆を創れたのだろうが、
――――倉峰は、創った絆を自らの手で叩き壊してしまった、そう儂は予想している。
――――奴が傭兵業に足を踏み入れる二年前、
倉峰姓を持つ中年の死体が、京都の古アパートで見つかった。
死因は、他殺だった。
その一人息子は、それから行方不明だそうだ。

――――大阪。
日本において東京に次いで2位――――ということは今や1位の活気を持つ都市。
まあ、今やどの都市も首都壊滅のせいでやっていけなくなってもう瀕死なわけだが。
首都がなくなったことで地方は変革を求められたのだ。
これからの知事の戦いは、予算の分捕り争いではなく、地方自身で払われる税金でどれだけやりくりするかということが争点となっているのだ。
――――その戦いに勝利できたのは大阪だけだった。
公務員に払われる給料はほとんど首都から来ていたため、それが壊滅すると公務員は生きていけなくなる。

――――つまり、警官の給料は払われないということだ。
治安維持の暴力がない無法地帯と化した国がどのようになるか、想像に難くないと思う。
――――今日本は、犯罪組織が乱立する最悪の国となっている。
――――街にあふれかえっていたチンピラは粗悪品の銃を手に、略奪をおこなう集団と化し、
――――地方に散らばっていた暴力組織は画一化を図り次々と統合していく。
――――法の下、その番人として仕事をしてきた警官や、日本唯一の対外防衛暴力である
自衛隊ですら、一つの組織になり略奪を始める始末。
――――大阪は、そんな日本の中で唯一、事件前よりも活気を持つ都市となった。
――――大阪府知事、車谷謙三
元大阪指定暴力団木崎組四代組長であり、選挙の際、他のゼネコンに対し労働争議を引き起こさせ、違法収益、脱税を暴き、完全に潰し、その後――――
木崎組の下にいた2桁にも及ぶフロント企業の固定票を手に大阪知事まで駆け上った、狐の如く賢しい男である。
――――だが、手腕としては歴代最高といわれている男でもあり、ゼネコンの影響を受けずに当選したため、予算をせっせと土建屋に運ぶ必要もなく、その余剰分の予算を、“外国人街”の設立に使い、企業に大量の労働力を与え、競争力を高めた。
それに反対する労働勢力は、木坂組の手で潰していった。
――――そして、首都壊滅の事件後、
国際間は揺れ動き、そしてーーーーさらなる陰謀を働かせたのだった。
今、日本を支配してきた霞ヶ関の業突張りの豚どもはもういない。
ならばあの“ラズウェル”の化け物どもがいなくなれば、日本の金の吸引器であるその椅子に本国の人間が座れるかもしれないーーー

ーそんなことを各国の首脳どもは考えたのだろう。
そういった奴らが“犯罪組織の武力制圧”の名を借りて、日本の実効支配を目論んだーーーーが
その野望はことごとく失敗に終わった。
一番に乗り込んだアメリカのグリーンベレー共は、八つ裂きにされて、それを動画にとられてアメリカ政府にたたきつけやがった。
怒り狂った大統領が、もう一度“東京大空襲
“よろしく戦闘機での爆撃を実施したがーーーーバミューダトライアングルが如くぷっつりと無線が切れて忽然と爆撃機は消えたのだ
グリーンベレー虐殺動画は今度はＹｏｕｔｕｂｅ上に載せられ、さらに“もうこの生物兵器は製造工程に載せてますよ”という遠回しな脅迫も送られてきており、まともな監視すらできやしない状況なのだ。
――――で、各国が怖がって日本から監視の目が去ったことを利用して、
――――車谷は知恵を働かせ、こっちに天文学的な金が手に入る手段を思いついたのだ。
世界の警察を気取っているアメリカすら監視から手を引いている始末なのがこの国の現状――――そこで車谷は行動を起こす
――――各国の企業、暴力組織に“売り込み
“を行ったのだ。
そのセールストークはーーーー「大阪ドブ攫い業はじめました！」だった。
つまるところ資金洗浄、つまりマネーロンダリングだ。
企業ぐるみでの脱税で得た金、暴力組織の麻薬業で得た金、こうした表に出せない臭い金で日本の商品、つまりは、もはや販売量が一気に低下してしまった日本製ハイブリッド車や、数百単位が束になった高級腕時計や、グラビアアイドルの写真集まで幅広くドブ臭い金で交換を行おうということだ。
こうして、台湾からヨーロッパ、さらには韓国の暴力組織から企業

関係者まで集まる大都市となったのだ。
――――いま、日本製品は大阪でしか作れないので、需要が高まっている。よって、恐ろしく高値で売れるのだ。だから、大阪に来る方々はそれを買ってそのまま左から右へ横流しを行う。
――――大阪は企業が涙を流してこの怪しげな顧客に感謝をし、こういった外からの人たちは表に出せない汚い金をきれいさっぱり消去できる。
誰もがみんな幸せになれるシステムを作り上げ、そしてさらにその手腕ゆえに、大阪は今や事件前より活気を持つ都市と化したのだった。

・・・・・

レイナー・ハスウェルト視点より、とある偏屈な傭兵との会話

「と、いうわけだレイナー。理解できたか」
「ああよーく理解できたぜくそったれ。車谷ってのがどれだけの怪物かってことがな」
「ライオスのジジイもビックリしてたぜ。まさか首都壊滅をこう利用するとわな」
――――しみったれた国になったもんだな、日本。
クルーザーから見える瀬戸内海の建物は、サラエボの内戦地よろしく、砲撃と銃弾の痕跡が残ってないほうが少ない有様だった。
――――瀬戸内海では利権目的で中国軍が秘密裏に攻め込んできており、車谷が撃退したらしい、
――――が。
監視の目がないということはやはり厄介である。どんな薄汚い代物

を持ち込もうとも誰の目に留まることもないが、どれだけ潰したトマトよろしく、神から受け賜わりし鉄分とヘモグロビンの塊をまき散らそうとも掃除しようという素晴らしき面子に固められた善意を振り回す国家もいないのだ。
「ケツの穴がもう一つ増えることだけは勘弁願いたい。俺は傭兵であって、こんな陰謀合戦に巻き込まれる身分じゃあない」
「まったくだ。ライオスのジジイいつかホント反逆されないことを祈ってるよ」
「もう老い先短いんだ、そんなリスクみんな取らないよ」
――――まったく、こんな物騒な男を呼び出すあたり、今の日本がどれだけやばい状態かが見えてくる。
このとなりでブツブツ文句を垂れ流している男は、倉峰遥斗という。気だるげに細められている目と、目鼻立ちがそろった端正な顔、スラリとした肩までかかる薄闇色に染められた髪を持つこの少年がーーー米兵を恐怖のどん底にたたき落とした最悪の粛清人だとは思わないだろう。
エイミー・ソルジャーズ連盟特務会員であり
エイミー・ソルジャーズの誇る最強の遊撃隊である傭兵団“灰狼衆”頭目でもあるのだ
後方では遥か彼方鉄雨を降らし、前線に出れば統率された動きで効率よく死体の山を築きあげていく“遊撃隊”と情報収集、管理、潜入を行う“諜報隊”とに分かれた部隊。この傭兵団一小隊でアフガンのゲリラ隊のすべてを灰塵に帰すことができるとまで言われている怪物集団だ。
で、そんな剣呑な怪物を抱え込みたくなるほど、大阪は暴力を欲しがっているということになる。
それにーーーー呼んだ人間も人間だ。
元防衛省官僚、高山九山。
防衛省としてのコネと生まれ持っての交渉力を使い、官僚でありながら海外の武器の斡旋を車谷の親である木崎組にしていた人間だ。

官僚の安穏としたぬるま湯で生きることに一切魅力を感じきれず、そのような危険な交渉の場に人生の興奮を感じるようになった男。
――――まあ、暴力監視協会であるエイミーソルジャーズとは、特に敵対関係であるわけではないのだが、武器の密売商が、国際戦線部隊をよく呼ぶ気になったもんだ。
「さて――――――――――――――――――見えて来たな。――――――――――――――――ああ、くそったれだ。なんでこうも厄介事ばかりが集まるんだ俺の人生」
「どうした倉峰」
本州が徐々に見えてくると同時に、倉峰が毒づいた。
「見ろ見ろ。あそこは広島か。旧市街地でヒズボラのジハード宣言よろしくーーー広島ビル街が火葬場になってやがる。
――――ほう、ありゃＲＰＧか。
あはははは。遂に日本も対戦車ロケットが当たり前のように持ち出される国になったか！」
笑ってはいるが、顔は憎悪に染まっている。
――――白シャツ金髪のチンピラが、何を思ったかＲＰＧ弾頭を弾ける笑顔でうってやがる。
倉峰はあはははと壊れた笑いをあげると怨嗟の声をあげだした。ライオス会長への。
「冗談じゃあねえぞくそったれ！あの耄碌ジジイ、ついに痴呆の進行に加わって、薬もやりだしたってか！“灰狼衆”全員ターミネーター仕様に出来上がっていて、一声上げるだけでどんな奇蹟も呼び起こせるとかいう幻覚まで見だしたのか！記憶が消えた脳に捏造された幻覚で埋まるようになったってんなら、もうおしまいだこの連盟！」
「ヤー。全く終わってるね――――――――――――――――――――――――しかし
一目でわかる場末のチンピラが、粗悪品とはいえＲＰＧ持ってると

はね。素晴らしい。いつか個人で核兵器を持てる時代になるやもしれぬ」
――――全く非でえ話しがあったもんだ。
一昔前、ナイフを持つだけで目をキラキラさせ、さも自分が神のごとき力を持っているかのような幻想を抱いていたどーしようもないチンピラがいまやロケランもって大はしゃぎしているのだ。
――――つまり、それ程ここは武器取引盛んな地域になったということだ。いや、一因として絶対あの高山も噛んでいるのだが
「さて本州上陸っと」
そう倉峰が言い放つ。
――――が、そのときようやく状況が理解できた。
「――――――――――――――――――――レイナー。大阪行く前に一仕事だ
こいつらの除去をする」
そのチンピラが火葬していたのは、広島に移り住んでいた避難民だった。
――――エイミー・ソルジャーズの仕事にたった今切り替わったのだ。
倉峰が愛用の４０Ｓ＆Ｗ弾使用の自動拳銃ベレッタＭ８０００と、４４マグナム弾使用のリボルバー、トーラス・レイジングブルを抜き放つ。
「業腹ながら、仕事だ」その宣言ののち
旧広島には幾重もの悲鳴が連続的に木霊し、そして、静かになった。

・・・・・・・・

・・・・・

――――車谷視点より、とある二人組の傭兵との会合

――――来ましたか。
大阪府庁の知事室のデスクに横たわっていた私は体を起こす。
ノックの音に反応して。
「入ってください」
そう言って入ってきたのは、驚くほど若い男とーーーー鉄仮面を被った男だった。
若い男のほうは、整った顔立ちに仏頂面を張り付けている。それだけ見れば年相応の若者といった面立ちだが、気だるげに細められた目は濁りきっており、それはどこまでも果てない殺意を秘めた人間のそれだった。
鉄仮面の男は全く表情が読めないのは当たり前だが、目すらその鉄仮面に隠れて見えない
周りの景色が見えていないのは確実だろう。
二人とも黒ずくめのトレンチコートを着込んでおり、かなり目立つ服装をしているくせに一切の気配も感じられない。
それだけでこの二人が一級品の傭兵であることを一瞬で車谷は理解した。
「あなたが倉峰さんですか。九山に聞いた時から一度お会いしたかったのですよ」
「その高山はどこ行った。俺を呼び出した張本人だろう」
「あいつは今取引に行ってますよ。どうも大手の武器仲買企業と提携するつもりらしくて
四方八方情報を集めているところです。
――――さて本題に入りましょうか。

――――あのラズウェルの連中の“創造主”であるカルト宗教団体“賀北会”の盗聴、あなたがやったらしいですね」
「諜報といえ諜報と。ま、そうだよ」
「ぜひ教えてもらいたい。無論、タダとは言いません。こちらが持っている情報も差し上げます。
私らが聞きたいのは彼らの成り立ち。
それは隣のレイナー君が知っている情報ですね」
「ああ。そうだよ。あんたも抜け目がないね
レイナーの正体まで掴んだか」
「ああ。一体レイナー君を含めどの様に、どれくらい“賀北会”は“不浄人”を創っていた」
「――――――――――――――――――――――――――――――――」
レイナーは、鉄仮面のせいでこもる声で訥々と話し出した。
――――東京を死の町に変貌させた、“ラズウェル”の人間の誕生秘話を。

・・・・・・

“賀北会”

“廻れ廻れ狂信者共よ。今こそキリストの曙光は放たれた。唯一無二の救済の光は絶滅を持って現れるものと我ら見たり。さあ者々よ目を見開け。信者も異端も人非ざる者に至るまで。礫を用意せよ。杭を用意せよ。地上の者々よ余すとこなく自らの楔に杭を打ち込み雷火を持ってその身を焦がさんと。我々の存在が背信也。裏切り也。

然らばユダと同義の帰結に今至りし時也。我々が絶滅せし地上こそ
地が鳴き天が割れ神の楽園が降り落ちる時也。
――――我等、裏切りの同胞よ。今ここに降り落ちて死刑執行の時
来たれり“

――――ここの教祖が毎度の如く言っていた台詞。
――――こんなのでも元神父である。
栂直哉。
元カトリックの神父。
孤児院経営者にして貧民街の救済活動まで幅広く行う正に聖人そのものだった。
敬虔なクリスチャンであった栂が、こんなイカレ集団に成り下がってしまったのは、
――――旧ユーゴのスラム街の救済活動に従事してからだった。
――――そこで何が起こったかは分からない。
だが、その時から3年、奴は失踪することとなり、再び現れたのは、大量の人体を抱え、カルトの集団の教祖の肩書を引っさげて帰って来た。
――――それからだった。
狂気の思想団体の本格始動は。
そいつ等の思想は単純にして明快。
“現人類の抹殺”
――――救う事の出来ぬ命なら、
――――神すらも救えぬ生命なら、
全て滅べ。滅んで消えろ。祈りと怨嗟と絶望の果てで。それが貴様等人間なのだから。
神の全てを拒絶した愚かな生命の当然の帰結。
――――ならば、どうすればいい。

その考えに至った時。

栂はまさに地獄へと堕ちる覚悟を決めたのだろう。

――――進化の過程で、今の帰結になったであろう今の人類。
新たな人類の誕生の陰で、常に滅ぼされる者たちがいた。
旧人、アウストラロピテクス。
彼らは、ホモ・サピエンス誕生とともに姿を消した。
――――否、殺されたのだ。
ホモ・サピエンスに。
新人類の誕生と共に、過程にあった人類の全てが殺される。そういう性質が、このヒトという生物にはあるらしい。
ならば、
今の人類を滅ぼす為に、
――――新たな人類を作りだそう。そのような帰結になったのだ。
まさに、踏み込んではならぬ神の領域。
ヒトが、ヒトを作る。それも別の種類のものを。
栂は、自身の魂が煉獄で焼かれることも厭わず、ソレに踏み込んだ。
そうして、今の人類が消えた時点で、新たな人類の誕生を待ち、その者達を、神に導いてもらおう。
そうして、出来上がったのが、“不浄人”。
栂は、いまだ体の中で唯一解明されていない脳に着目し、脳に刺激を与える薬を徹底して与えた。
まず、無計画に薬を与えた結果出来上がったのが“前期”不浄人。
脳の運動能力の再配置が行われたことにより常人以上の身体性能と、凶悪なまでの特殊機能が追加された人間になり得たが、いかんせん薬の副作用が強すぎたようで、顔面の表層機関の全てが破壊され、ゾンビの如き風貌になってしまった。
どのような存在になり得ようが、元々あった人間の機能が失われてしまったのならそれはただの退化でしかない、と判断され、一斉処分が下された。

――――その時、運よく逃げ出せたのがレイナーである。
そしてーーーー
その反省を生かし、副作用が現れないほどの間隔を置いて、定期的に薬を飲ませるようになると問題は解決した。
顔の表層機関にダメージを与えることなく、身体性能と特殊機能を持った完璧なる“進化した人間”の誕生だった。

――――が
その団体は一夜にして滅び去ることとなる。
――――自らが創った怪物に喰い殺されて。
２０１３年５月１２日１６時２９分
“灰狼衆”の謀聴用録音無線機に阿鼻叫喚の断末魔が録音された。
――――その地獄の中で、あのダミ声の笑い声もけたたましく響いていた

・・・・

「――――へえ。そういう思想団体だったわけですね。終末思想型のカルト宗派だったと思っていたのですが、まあ自らの存在が罪業と感じる連中はいくらでもいたが――――――――――――――――ここまで自己否定をする宗派も珍しいですね」
「わかってるとは思うが救いようもない連中だ。ヨハネスブルクのヤク中だってこんな悲観的にはなりゃしねえ。神を否定したくないから今いる人間を否定する。それが“賀北会”だ。自らが創った牙に喰い殺される瞬間さえも――――――――――――――――――――――奴等は逃げようともしなかった。最後の断末魔しか上げていなかった」
「――――具体的にはどのような薬を持ってしてその“不浄人”は作られていたのですか？」

「ライオスのクソ爺の部隊が調査に入ったみたいだがデータは紙切れ一ついなかったよ。奴等の本部のバンカーも火葬場だ。なーんも残ってなかったよ」

「レイナー君は、どのようにして倉峰君の下に来ることができたのですか？」

「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーバンカーをこじあけた」

「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーえ？」

「こじあけたといっている」

ここで冗談を言いますか。よくよくセンスが分からないお人だ。

あのバンカーは鉄筋でがちがちに固めた電動開閉式ドアで、関係者の網膜スキャンでしか出入りができなかったはずだ

そしてそのドアは指紋検証をすることでしか開かないはず。

信者を襲って指紋検証させたなら“こじあける”の表現はおかしい。

そう思ったがーーーー

「まあ、みてなよ」

そう言うとレイナーは私の後ろに有った窓を開ける。そこでおもむろに左手をその窓の外に向け、凄まじいものを私に見せてくれた。

――――まず左腕が膨張していく。

左腕に空気を注入しているかの如く。

で

新幹線並みのスピードでその左腕が弾け伸びた。

――――私はただただ呆然とするしかなかった。なるほどこれならばあの鉄筋のドアも吹き飛ばすことができよう

「これが“不浄人”の力。“不浄人”は何かしら身体機能が強化されているらしいな。

レイナーの場合細胞再生速度と左腕に限って

膨張ができるものらしい。つまり、心臓と脳が破壊されない限りいつまでも生きられる上に、どんな傷を負ってもすぐ再生してしまう。

――――それだけ見れば、まぁ進化した人間と呼べなくもない」
「――――となると、何か問題があったのですか」
「――」
数秒黙りこくるとレイナーは頷きそのまま鉄仮面を外した
――――そこには
「――――！」
ゾンビの如く表皮が剥げ、肉質をあらわにした顔があった。
それは顔の表層器官のすべてーーーー例え目であっても同じように光を失っている。
「――――これが“前期”不浄人全員に共通する特徴だ。データがないから原因は知らんがろくでもないことばだけは確かだろうよ。データも死体もまとめて“後期”の奴等が火炎放射器遊覧ツアーにブチ込んでくれたおかげでぜーーーーんぶ地獄の窯の中だ。ホントバツが悪い。せいぜい火葬されて安らかにお陀仏になっていることを願っているよ。いやホント」
「その“後期”とは、あのＴＶに移っていた連中ですね」
「ああ。栂の奴、“カタチが退化しては全く意味がない”ってなことで“前期”の奴等の大量処分を行った。その時運よく逃げ出せたのがレイナーだ。で、こいつと偶然会った俺はライオスに報告。そのままあのイカレ集団の諜報任務をものの見事に押し付けられて今に至るわけだ。アハハハハハ。２年以内にあのクソ爺が暗殺されるまたは失脚するに仲間内で1万ドルかけているところだ。まあ、さっさとジジイらしく勝手にくたばってくれりゃ涙を流してあの世へと見送った後は祝賀パーティーを自腹で開くことを約束している。と、いうわけでさっさとくたばりやがれってな話なんですよジジイもラズウェルも」
「そう言いなさんな倉峰さん。世界を最も騒がせた事件の最前線にいるんだ。解決したらあなたと、エイミー・ソルジャーズの知名度も上がりますよ」

「あんなくそ爺の知名度を上げて何が嬉しいんだ。舞い上がって寿命が延びたらどうする
ってんだよ」
「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー約束だ。俺達は知ってることを全部話した。お前等の情報をよこせ」
すでに仮面をかぶりなおしたレイナーが陰鬱そうにそう口を開いた。
「ーーーーええ。わかってますよ。それは別の人に話してもらいますので、あと少し待ってください」
「高山か？」
「いえ違います。もうそろそろ来ますよ。」
ーーーー事件前、私の親である木坂組と大阪の暴力勢力を二分していたギャング集団のリーダーが」
「ーーーーまさかな。あの暗殺集団まで取り込んだのかアンタ」
「ただの利害の一致です。ただその利害の結びつきが大きいのでそこらの信頼関係より強固な関係ですけどね」
そうーーーーその名は
「ーーーー荒海都」

・・・・

略奪集団“濁り水”団員中村亜鎖黄［無論偽名］視点より
暗殺集団“絶暴”リーダー荒海都との対峙

時は少し前後する。

「いやいや、なんなんだお前等。その人数でそんな粗悪品とはいえ銃なんか持ちやがって。こりゃ、ケツに穴どころか蜂の巣を作りたがってるように見えるがーーーー向けている方角が問題なんだよな」

大阪旧神戸市の廃工場内。
俺の目の前にはとある物騒な男が立っている
一目見たら、これといった特徴はーーーー隻腕であることしかないだろう。
その男は紺の、袖がゆったりと長いローブのような外套を着込んでいる。その特徴的な袖は片方、手が通っていない。
そう、この男は４年前木坂組系列の暴力団代海組若頭桐山将悟との果し合いで片腕を切り落とされているのだ。
それまでーーーー何十人もの大阪の暴力団員
を密やかに静かにだが凄惨に奈落の底に沈めてきた荒海の“絶暴”はーーーーその後の消息は不明となっていた。
――――が、ラズウェル事件後、どこの暴力組織も我が身かわいさの為と迅速に覇権拡大をするために広域暴力団に吸収される中でただ代海組だけが木坂組から分裂を行った。
代海組組長代海蓮華は桐山将悟を筆頭に武闘派の連中の木坂組からほとんどを引き抜き分裂を行っていた。
――――その為、暴力行使能力を大いに削がれた木坂組はその補強を行ったのだ。
――――それが、“絶暴”との提携だった。
まさに誰もが考えはしなかった奇策だったであろう。
いままでフリーの殺し屋のような形で仕事を行っていた荒海だが、桐山将悟との果し合い
で敗北して以来行方をくらませていた。
それが今、こうして嫌味を垂れ流しながら目の前にいる。
「なあ、濁り水ども。
――――文字通り寄せ集めの三下共が、俺を殺れるのか？
――――ここでの垂れ死ぬようなゴミカスがいままで、暗殺稼業をやってこれたとでも思ってるのか。
――――甘い。甘いぜ。泣けてくる程な。
――――認識が足りない者は早死にする。それを教えてやらんとな」

「――――ぬかせ。お前等は尾行するのに慣れていても、尾行される方には慣れてなかったみたいだな。のこのこ一人で歩きやがって――――死ね」
そうだ。
こいつ等は神戸周辺の見回りを行った後その後散開しやがった。バックスバニーの犬並みに間抜けな連中だ。
いくら腕利きの暗殺者とはいえ、何十もの弾丸をよける奴なぞそんなもの人間ではない。
――――が
この状態においてもまだ奴は薄ら笑いを浮かべてやがる。
「――――で、俺の首にはいくら懸かってるのかな」
「――――18万ドルだ」
「代海組はその二倍懸けていたのに、安くなったもんだな。
――――まあ、お前等にはもったいない価格なのは確かだな
――――バックスバニーのワン公は手前等だったな。ケツから罠に引っかかったのに、最後の最後まで気が付かなかったもんなぁ
――――さいなら」
その言葉を最後に俺たちは
――――自分にかかる影を見た
「えっ」
――――頸動脈を裂いたナイフの微かな風切り音と鮮血と共に。
「が――――――――――――――――――――――――アアアアアアアア！」
背後には――――――――――――――――――――――――荒海と同じローブのような袖の外套を着こんだ男たちが倒れていく俺達を悠然と見下ろしていた。
――――“絶暴”
「な――――――――――――――――――――――――ぜ」
「何故かって？この期に及んでわからんのかカス共。誘導されたのはお前等。

――――あらかじめ隠れていたこいつ等にも気付かないとはね。バカもここに極まりだ。
とっとと死ね」
――――そういうと荒海は立ち上がり俺達を蹴とばした。
「―――――――――――――ま、寄せ集めのバカにしては中々堂に入った尾行だったよ。笑いを抑えるのに大変だった――――――――――――――――――――――――――――ご愁傷様。
じゃ、江崎にばれたら面倒だからここ爆破するから。ごめんね」
俺達は、最後の恨み言を残す。
意味ないことと知りながらも。
「―――――――――――――――――畜生。江崎さんさえ―――――――――――――江崎さんさえいりゃあ手前等なんか―――――――――――――――――」
「――――しまんねえなぁ。最後の言葉が負け惜しみか。ま、いいや」
荒海が工場から出て、薄れていく意識の中俺たちが最後に見たのは、――――ぼんやりとした紅色と、麻痺した感覚の中でも一際映える灼熱の温度だけだった。

・・・・・・

旧大阪府役所　知事室倉峰遥斗の視点より

――――俺の目の前に立つ男を視点を切り替え切り替えして、“見る”
思考の方向性と主観を切り替え様々な観点から本来カタチの無い“

個”としての人間を見るのだ。思考をシフトして人間を観察する。
これが俺の人間観察法だ。
そうして切り取られた“車谷謙三”という人間を“見る”と、
――――なるほど
この何気ない会話の中にも感じ取れた。
――――奴も俺と同じことをしている、と。
その時点でわかった。奴は指導者のタイプとして、ライオスのジジイとはまた違う人間だ
ライオスを“鉄人”とするなら奴は“狐”
誰にも自分の考えをさらさせず、人知れず謀
の根を張るタイプの人間だ。
何故判断できるのかって？こんなタイプの人間は戦場で腐るほど見てきた。優秀なやつも愚鈍な連中も含めて諸々。
――――この男が化物じみた天才だということはわかる。首都崩壊後の大阪をここまで生き延びさせてきた手腕は本物であろう
――――だが
「――――さて、“死神の眼”から見てあなたは私をどう見ましたか？倉峰さん」
「――――あんたは俺と同類だが、格が違うな。だが存在価値性が違う」
「――――ほう」
「あんたは多を生かすため。俺たちは不都合な小を消すため。存在価値そのものが違う」
「――――そうは言うけどやはり、私もあなたも多にとって都合のいい存在でしょう。
――――都合がいいも悪いもその多が決めることですから。務め人はつらいですね」
「いつからお前たちヤクザが務め人になったんだよ。本当に世も末だ」
「まあ、表世界に出られただけ感謝したいところです。あんな稼業

やっていてよく生きてこられたもんだと思っているくらいですからね。ありがたく務めさせていただきますよ。
まあこの大阪も繁栄はしていますけどね。
繁栄させているのは私たち含めてろくでなしによるものですから」
「――――本当にな。こんな場末のチンピラ引き入れるあたり、どれだけ人員不足かが分かるぜ。街見回すと外出てる連中は黒白分かれたスーツ連中ばかり。これこそ末期だと思ったぜ俺は」
――――知事室のドアの前には壁にもたれかかった少年が一人いる。染めているのかいないのかブロンド色の髪を肩口までかけ、丁寧に整えられた顔を虚空に向けてしゃべっている少年がいた。
――――芸術品さながらの美貌と、雰囲気をだしているこの少年は、だがそれにあるまじき欠陥が存在した。
――――隻腕だったのだ。
あるべき左腕の造形がもはや跡形もなくなっている。
「――――あんたが？」
「ああ。荒海都だ。
暗殺と斥候の請負チーム“絶暴”のリーダーをやらせてもらっている。
――――まあ、この腕はな、唯一の若き日の過ちのようなものだ。むしろ今は片腕のほうが都合がよくてなあ。重心移動の幅が広がった。だから、ほら」
瞬間
――――荒海の姿が消えていた。
「――――ハ」
笑みがこぼれた
――――それほど見事な移動術だった
荒海は半円状に体幹を廻し、その勢いと重心の方向のまま野球のライナー球が如く駆け飛び俺の肩口を通り過ぎたのだ。
俺の背後に着地するまでの秒数、僅か2秒。
――――だが、感心している暇もなかった。

何を思ったか荒海がその華奢な体躯に似合わぬ剣呑な軍用ナイフを抜き放っていたからだ
――――だから俺は、
――――背後にたった荒海の腕を取る。
「――――――――――――――――――――なっ！」
それを逆関節を極めてから一気に体重をかけて、背負う。
――――が
荒海は手首の関節を外しつかんだ腕を引き剥がし、その勢いのまま俺の顎を蹴り上げる。
――――が引き剥がされたときにすでに振りかぶっていた左腕で俺は荒海のレバーに直突を行う。
俺はそのまま後ろにぶっ倒れ
荒海は知事室の壁に派手にぶち当たった。
それと同時に拍手が鳴り響く。
「素晴らしい。荒海君のその動きに対応できた人物は君が初めてです。やはり、エイミー・ソルジャーズの懐刀の名は伊達ではなかったのですね」
「そんなことはどうだっていい
――――荒海、お前が持っている情報とやらを教えろ。そのために俺は来たようなものだしな」
「わかってるって。
――――――――――――――――――――ああクソいってえなあ畜生。
アンタも容赦ないねっと」
そういうと荒海はのっそりと立ち上がる
そして袖口がゆったりとしたローブを、幽鬼のようにはためかし表情を性悪なものに替える。
「最近な、イギリスの経済状態が破産寸前だと聞いたことがあるか？」
「ああ」

グレートブリテン及び北アイルランド連合王国。
確かイギリスの正式名称はそんなんだったっけ。
いま、もはや“寿命2年”とすら申告されている“古代”大英帝国。
寿命を縮めたのは新しく首を挿げ替えられた大統領の愚策によるものだった。
――――アメリカの住宅バブルを背景に、イギリスのほうでもアメリカのサブプライム証券の大規模な買い取りを支援する政策を打ち出していた。
だが、所詮サブプライム、つまり信用度の低い人間向けの屑証券である。その屑が世界中で買われた背景にはどれほど信用度が低かろうが住宅担保で元が取れていたからであろう
――――がそのバブルもついには弾け飛ぶ。
住宅の価値が下がった瞬間、すべてが終わった。
屑債権の唯一の内在価値が失われたとき残ったものは餌を無くし、血に飢えた獣と化した債券者と、2重3重の債務のみが残ってしまったカモの山だけだった。
それは国ぐるみでその屑債券の取引をしていたイギリスもまた然りである。
「バブルが弾けるのは日本見ればわかるでしょうに――――――――――――――――――――――――――――――――まあいつの世も変わらないってことですか」
そう、しみじみと車谷は呟く。
荒海は皮肉気な冷笑を少しも崩さず車谷に話しかける。
「お前も外資のフロント持っていただろうに
大丈夫だったのかよ？」
「あんな屑債券に私が手を出しますか。
――――まあ、それを機にイギリスは大規模な労働争議が頻発しました。元々北アイルランド紛争を例とすればわかるように宗教の対立が思ったより結構深い国ですし。
――――こういうことには敏感に揚げ足取りが起こるのでしょう」

「そんなことはどうだっていいんだ。それこそサブプライムで内臓の転売にまで追い詰められている債務者位な。それがどうここで繋がるんだよ。きっちり説明してくれ」
「白人主義の美国人どもの考えることは同じってことだ。
――――またまた米につづいて奴等は生命換金業を始めようとしやがった」
「ああ――――――――――――――――――――。なるほど」
すべて納得できた。確かにここで持て余し気味の世界第二位の軍隊を使うべき、と発想してもおかしくはない。
――――だが
「ですけど、残念ながらアメリカほど簡単にドンパチを始めるわけにはいかないんですよね。ＮＡＴＯの手前、利潤目的の戦争をするわけにもいかないですし。奴等は“ヨーロッパの正義の御旗”を背負わされてるんです。もし戦争などやってしまったら世界中で自分たちのことは完全に棚上げして大ブーイングが起こります。
――――なら、正義の御旗を振るえながら戦える場所――――例えば生物兵器によって犯罪組織に首都を奪われてしまった国とかだったらーーーーどうですか？」
「――――なるほど」
つまるところ、兵器産業をもうけさせるために日本がいいダシにされているというところか。
「奴らは国際会議の場で“日本の犯罪組織駆除”は我々が行う。だから軍事費を廻してくれときやがった。
――――アメリカは爆撃機消失と、別の中東あたりの戦場を抱えているせいで逃げ腰、ロシアは自分の所の子飼いの元チェーカーに新型兵器を持たせていたことが露呈するのが嫌なので静観を決めきってるし、中国はいまだに何を考えているかが分からないしで捨て置かれているから今の日本は放置国家もいいところだ。
――――だから、イギリスが入ってきたわけよ」
「で、ここに協力を持ちかけた、と」

「全くその通りです。大阪だけが唯一まともに機能している日本の都市ですからね。まあ
傲慢そのものでしたねあの美国人。あいつ等の頭の中は大英帝国の覇権国家時代から時が止まっているようですね。多分、白人以外の人間がいなくなれば遺伝子改造で豚の鳴き声すら“白人万歳”と叫ぶように調整するでしょう」
「で、そいつらが低俗な猿と手を取り合う理由がソレかよ――――――――――――――――――――――――手段を選んでいられなくなってきたんだな」
「さて、で、そこで問題が発生したんだ。
――――主導権が誰もちなのかということでな。
俺達にとってみりゃ、こっちの神聖なる悪徳の町を奴等美国人共に土足で踏み歩かせるわけだから日本での指揮権は当然こっちにあると思うわな。
――――だがやっこさんは違ったみたいだ。
極道とチンピラのイエローモンキー軍団なんかの屑にも劣る脳味噌の持ち主なんか、オツムの出来具合が怪しいから出直して来いだとよ。一度奴らの頭の中にシリコンをぶちこみたい気分になるぜ全く。
――――そんなわけで今揉めに揉めてる。どっちかの脳漿が吹き飛ぶかもしれない次元までな。
そこで、俺たちはこう提案したわけだ」
「代表者同士で正々堂々戦い、勝利したほうが指揮権を持つ、それで手を打ちましょう、と」
――――なるほど。確かに手っ取り早い。
――――いや、待てよ。
「まさかその代表者ってのはーーーー」
「あなたです。倉峰遥斗君」
・
・
・

・　・

旧京都府　国立公園　桐山将悟視点より
とある囚われのイラン人との対面

親愛なる代海組長へ、元気ですか
こっちはすこぶる元気です。
「あんた方はさ。考えたことある？
麻薬ってのが、なんでこの世に生まれ落ちたのかって？」
今貴女が命令した処理対象と接触いたしました。少し茶目っ気をだして極道らしいセリフの一つなど吐いて見せます。
「人の意識を宇宙の彼方まで飛ばして、寄生虫が如く残りカスが体内にウジウジ依存した挙句相撲取りの体系をしたマトリックスに追いかけられてると喚き通しやがるようになる魔法のクスリだ。素晴らしいよねえ。
――――こんなもん人類にとっちゃあ百害あって一利なし。
――――なら、俺達のような裏街道の人間にとっては得をしたのかね？
――――そんなこたあ無い。
結局人間にとって破滅をもたらすだけのケシ畑を守るためにどれだけ俺たちの血が流れたんだろうな。元々暴力団にだって意味があったんだ。自己中心的で民主主義の原理をパンの耳ほども理解していない労働者団体や、立場によっては左翼、右翼の連中の対処。
高利貸しの仕事だって、毎日毎日にっちもさっちも行かない連中の手助けをしていると言えなくもないんだぜ。
――――だが、麻薬の販売なんぞという外法を使ってしまったことで、それらの本分がそっちのけになってしまった。
木坂組は、そのことをよーーく分かってたんだろうよ。薬には手を出さなかった。
――――全部悪いのは麻薬だよ」

――――イラン人がこちらを見ています。
彼らは、まあ典型的な麻薬密売商です。
今行政が機能していない日本に目を付けて、誰からも監視を受けることなく大手を振って麻薬を売り飛ばすつもりだったんでしょう。
全く馬鹿ここに極まり、です。日本の暴力集団の勢力図を一度でも調べ上げていたならばこんな無謀な計画は立てなかっただろうに。
彼らが無謀にも足を踏み入れた所は旧京都府。
今や新たな代海組のシマとなったこの場所で、中国のマフィア連中と取引を行う予定だったという。
――――こちらとしても、このような状況になったおかげで死体処理もそのまま川に放り込めばいいだけのぞんざいな方法で済んでいるのだ。死体の一つや二つ、増えた所で痛くも痒くもない。
――――哀れです。
「麻薬があったおかげでヤクザ連中は自分の本業を忘れちまった。
そんな仕事より手っ取り早く金が入るからな。
――――でもな、人間破滅させるだけのクスリ作りに躍起になってそれをパンパカ売り飛ばすなんてなってしまったら、司法の連中も動かざるを得ないだろう？それに裏稼業同士の抗争も増えちまった。
結果、麻薬は俺達も
堅気も一切の得を与えていないんだよ。
――――極端な話、本当に麻薬は地球が人類を滅ぼすために作ったんじゃあないだろうか
ヤクザも堅気ももう麻薬から抜け出せない。
どんどん両方破滅していく。麻薬は人類の敵だよ。
――――まあ、分かっててもも手を出してしまうんだよな。金も快楽も手っ取り早く手に入る。素晴らしい毒薬だよ」
イラン人の動きが怪しいです。手が。
縄で手を縛り上げており猿ぐつわ姿です。
――――大方、袖に隠したナイフを使って、縄を切っているのでしょう。

――――本当に哀れです。
イラン人が理解できない言葉を発しながら、こっちにリボルバーを向けてきます。
――――吹き抜ける轟音と血潮
――――脳漿と共に公園の緑を紅に染められたのはイラン人だった。
さすがデザートイーグル。この反動、半端ないですね。
イラン人は頭の半分を吹き飛ばし、ただの肉塊になっています。
これで一件落着ですね。代海組長に連絡をしましょう。
海外の電波を拾って作動できるように改造した携帯電話を手に取ります。
「桐山です。麻薬密売商の排除。終了いたしました。これから戻ります。
――――えっ。ああそうですか。
了解です。ようやくあのいけ好かないオヤジとの闘いになるのですね」
――――桐山は薄く、微笑む。
「あの“化狐”車谷と――――――――――――――――――」
――――5年前。
麻薬王、ナギ＝ジャン率いるトラスト・ブレインとの抗争において、権謀算術の限りを尽し撤退にまで追い込んだ、木坂組において伝説の人間の一人となった男の名と、異名を呟いていた。

・・・・・

高山九山視点より、倉峰遥斗との邂逅

「おーおー。高山九山ではありませんか。
公民に恂ずるはずの官僚のくせして、防衛省という立場を利用して

人民の敵たる暴力組織に武器をリクルートしだして早8年。
その金塊を詰め込んだとしか思えぬビール腹はまだ健在のようですなぁ」
――――まだくたばってなかったんだな。いやぁ良かった。
――――このガキは俺が地獄にたたき落としてやらんと気が済まんからな。
「いやいや。数多くの同類を澄ました顔して赤い蜜入りの蜂の巣に仕立て上げてきた倉峰さんこそお変わりなく。その天使の如きお顔をどれほどの死体が見たでありましょうか。
恐ろしいことであります」
このガキの生意気ぶりも拍車がかかって来たな。ますます殺したくなってくる。
――――実際、俺はこいつに一度嵌められかけた。
――――武器取引を行ったヤクザの連中がある日カチコミにあった。その相手は同業者の抗争でもなく、サツの連中でもなかった。
――――倉峰の“灰狼衆”だった。
そのヤクザ連中はコロンビアの“麻薬王”ナギ＝ジャンの取引相手の一つだった。
――――世界最大の民間軍事会社の“キリングワイス”と現在一触即発状態にあるのが、倉峰の所属するエイミー・ソルジャーズ連盟である。
――――キリングワイスは元々の傭兵業以外に武器の仲買業や、犯罪組織の護衛業までやりだしたのだ。
そのうちの一つが、“麻薬王”ナギ＝ジャンのケシ畑の守護任務だった。
――――ならば、と
――――キリングワイス壊滅計画の手始めに“麻薬王”の情報を奪取せんと、取引相手だったヤクザ組織を急襲したのだ。
――――その“ついで”とばかりに奴らの武器取引相手の情報まで取り出しやがったのだ

――――もしあの時偽名を使っていなかったらカービン銃の弾丸でミンチになった俺の肉体は禿鷹にむしゃぶり喰われていただろうな。
――――その時、倉峰が仕掛けた二重の罠に見事に引っかかりそうになり、俺の首は火星まで左遷されそうになっていたのだ。
――――このガキだけは俺が地獄にたたき落としてやる。その時そう決意したのだ。
「はん。お変わりがないようで。いつ不摂生が祟って肝臓ガンにならないか不安で不安でしょうがなかったんだが、やはりまだ大丈夫っぽいな。ケツが原寸大に刻まれかけてもまだ懲りんか」
「ククク――――――――――――まあ、次の代表戦でくたばることを期待しているよ、クソガキ」
――――まあ、そんなことでくたばるガキじゃない事位はわかってるさ。
――――だが、思わぬ苦戦はあるかもな
「――――車谷から、相手、聞かされたか」
「――――ああ」
そうして、
いつも文句を言いながらも飄々としているこいつにしては珍しく苦々しい表情をしている
「――――イギリス王家からその誉れある経歴と戦果から新たな姓を与えられた一族。
――――アトラス家。その長女クライア＝アトラス」
「よくわかってんじゃねえか」
「聞けば聞くほど胡散臭い貴族だ。
――――アトラスの名を与えられたのも４００年前異能の力で吸血鬼を討ち滅ぼしたからだとか調べたら出てきやがった。
――――もはやよく言えば伝承、悪く言えばオカルトと疑われても仕方がない情報がイギリス王家の書庫に堂々と存在していたのが信じられん」
何故、イギリス王家の書庫の閲覧ができるのかなどと疑ってはいけ

ない。この男の背後の組織の情報網はアルカイダから皇室まで幅広く分布している。実際、そのおかげで俺は破滅しかけたのだからな。
「なんにしてもここであわててても仕方ない。
さっさとやってさっさと玉砕して来い。骨は拾っといてやるよ」
「そりゃあいい。
――――あんたも、こんな商売続けてると、絶対いつか破滅するよ」
「そりゃ、わかっている。だが安穏とした人生ってのも中々地獄だ。ジジイになって死ぬ前に残っていた記憶が机にかじりついてるだけってのは、想像もしたくない」
「――――なるほど。安穏とした国の住民だからこその渇望、か。俺としては生きてるだけで幸せだと思うのだがな」
おやまあ、本当にこの男のセリフかい？俺以上に切った張ったの世界を生きてきた男が何を言うか。
「それお前がいうのか！
――――おいおいどうした。
アンクルサムお抱えの生命換金屋のケツを吹っ飛ばしてきた男が何を言う？お前は、じゃあなんで傭兵なんかになったんだ！
――――あっ」
そういえば思い出した。
――――こいつはーーーー
「――――高山。俺はな、安穏と生きるべき人間の人生を叩き壊したんだ。そいつが何で、どんな顔してこれから普通の人生を歩めというのだ。そして俺は、これ以外の生き方を模索する気もおきない」
そう言った倉峰の表情は、何の感情も浮かんでいなかった。
――――これこそが、今の倉峰の本質。
自らの意思で感情を消し、人生を否定し、幸福を否定した人間の末路。
普段の仮面を引っぺがした、倉峰の姿だった。
「さて、しみったれた話はここまでとして。
――――高山、依頼だ」

「――――ほう」
倉峰は俺に紙を渡す。
――――多分、俺の顔は青ざめていただろう
「おい――――――――――――――――――――――――これ、何に使うつもりだ？」
「――――――――――――――――――――――――――――決まってんだろ。戦争だ」
――――こいつ――――――――――――――――――――。
俺は青ざめた顔で静かに頷いた。

・
・
・
・

――――４ヵ月後、現在
倉峰、高山、荒海の３人で治安維持団体“サファオル”を設立した。
サファオルは詰まる所警察である。
高山は武器の供給を行い、倉峰が警官と自衛隊の役目で、荒海が公安。
――――ただ普通の警察とは多少倫理観が違う。
普通の警察は武器は持っても使用しないのが原則だ。生きて被疑者を確保することを前提として動いている。拳銃の発砲することは出世が止まる、のイコール関係である。
――――だがエイミー・ソルジャーズ連盟の傭兵は全員が携帯している武器は軍用オートとＡＫ４７――――ロシア製のアサルトも携行している。
――――現行犯であるならば射殺も許可されているのだ。さらに突っ立ているのが制服姿のやる気のない雰囲気を醸し出したジャパニーズポリスメンではなく、全員黒ずくめのトレンチコート連中であるので威圧感も凄まじい。
ここまで威圧的な演出をした理由として、

――――マフィアを顧客としているので治安維持隊の権限を強くしなければやってられないのだ。
――――そして荒海の“絶暴”は対内、外の諜報活動と潜入工作を司っている。
ーーーーこの都市の秘密を探ろうとするジャーナリストや各国の諜報員を大阪からたたき出すのが主な役目になっている
事実、そういった人間は数多くいたが、城壁で固められた大阪の街からたたき出され、六十四式自動小銃を引っさげた迷彩色の連中や死に物狂いで日々を生き残っているハイエナ共に尻の先までむしゃぶり喰われている有様でもう誰も入ってこなくなった。
こうして、大阪は自治に必要な全ての物が揃った。
暴力、産業、民、体制全てが。
――――さて
長い長いプロローグはここで終了だ。
本編はここからスタートを切る。

目録1　　見知らぬ罠

車谷謙三視点より、高山九山との対話
「全て、全ておかしい。
――――笑えよ、車谷。
倉峰のクソガキ、ウィル・オート・サムソン社の最新モデルを三千丁持ってこいとぬかしやがった。
――――しかも驚け。泣く子も月まで吹っ飛ばすアンチマテリアルライフルときやがった
――――冗談じゃねえぞくそったれ。
奴はなんだ、ゴジラとでも決闘するつもりなのか？正気の沙汰じゃ

ねえ」
「へえ、対物ライフルときましたか。
――――まあ、これから車両との闘いもあるかもしれないですし、さすがにそのライフルに対抗できる戦車はどの組織も用意できないでしょう」
――――アンチマテリアルライフル
装甲車やヘリコプターなどの車両や、塹壕ごと敵を吹っ飛ばすためのライフルです。
無論、使われるライフルも弾丸も反動も通常の比べ物にならない比較となるでしょう。
そんな剣呑なライフルをあの怪物集団が持ったのです。そりゃ、高山も気が気でないでしょう。
「で、そんなことはどうでもいいんです。
――――ハワイとの連中との武器取引はどうしました？」
「ああ
――――そのことで話があるんだ」
高山はいつもの神経質そうな声で細々としゃべり出した。
――――経緯はこうです。
高山は最近武器の相場が激しく変動していることを訝しみ、その震源場所を調べていた。
――――その震源場所があろうことかハワイアンマフィア崩れのチンピラだったのだ。
それはまさにライターを持った猿人類が百万人の米兵を相手にして勝つぐらいありえないことだった。
それを訝しんだ高山は自分のコネクションからそのチンピラたちに連絡を取り、取引を持ちかけたのだ。
――――そこで見たものは
「信じられるか車谷――――――。
――――これが奴らが俺達に売り飛ばしてきたものだ」
傭兵がそこでこの部屋に入り、ハワイの“お土産”を持ち運んだ

そこにはーーー軍用オートの拳銃から、特殊部隊仕様のサブマシンガンからＲＰＧまでより取り見取り。約２００点
――――さすがの私もそれにはビックリしましたが、あり得る話ではあります。
チンピラを使って、危ない橋を渡らせるのはよくある話です。今回、それが私の知りうる限り非常に大規模だった。それだけです。
――――けど。
「――――まあ、何にせよ今は事態を見守るしかありませんよ。事実、これだけ武器が手に入ったのは喜ばしいことです」
「そう楽観的でいいのか。
――――ガキでもわかる。絶対に裏があるってな。もっと信じられねえことに値切りもしないうちにあのチンピラどもこの山の様なチャカを定価の3分の2で売りつけやがった。
それに更に買うんだったら今度は半額にするとだとさ」
「大盤振る舞いですねぇ。不況の時代に素晴らしいです」
「いつの時代もチンピラの財政状態は変わんねえよ。
――――危ない橋渡らせるような小物は利益を黒にしなけりゃ目ん玉をはも切りにされる身分だ。本当に奴隷にも満たん扱いだぞあいつらは」
相変わらず口が悪いですねえ。荒海君といい
倉峰君といい、私の下にいる方々はどうも良い教育を受けていらっしゃらないようで。
「――――倉峰君は今どこにいらっしゃいますか？」
「あのクソガキは中国軍の駆除に行ってるよ
依頼が入ったんだとさ。今また四国を占拠したらしい」
「――――多少、嫌な予感がしますね。
――――でも、まあなんとかなるでしょう。
倉峰君なら少々の問題なら灰燼に帰してくれるでしょうから」
――――彼なら冗談抜きで一日でこの都市を吹き飛ばせますしね。
少し、寒気が走った。

・・・・・・

――――時は６年ほど遡り
倭田玄朗斎視点より　死神の弟子との対話

目の前に立つ怪才を、儂は虚空を眺めるがごとく見る。
数か月前、弟子となったこの少年は倉峰遥斗という。
そう。ほんの数か月前の話だ。
この豊食の時代における子供に似つかわしくないボロ衣を着込んで、儂の家の前に物乞いをするでもなく、立ち尽くしている少年がいたのだ。
元傭兵の儂にとってそんなガキは一瞬でも憐憫を感じるものでもなかった。戦場では笑い半分に妊婦の腹から子供を引きずりだして、その子供が男か女かで賭けを行っていた連中も居た位だ。その程度で命を削って築き上げてきた富を恵んでやろうと思うほど人間ができて居ない。
よって儂が自分の家にそのガキを招いたのは別の理由があるということだ。
それは、言ってしまえば好奇心だ。
そのガキの目は、戦場ですら見たことがないほどーーーー得体のしれない何かを見据えた目だった。
その眼の正体がすぐに分かった。
――――そう、
この少年の眼は常に“死”を見据えている、と。
立ち会った理由はいたって単純。このガキを招いた衝動の元である儂の“好奇心”を充足させる為。それは狙い通り、理解することとなる。

そして木刀を渡して、立ち会ったのだ。
そこで、理解できた。
その眼から伝わってくるものは、自分が殺される未来を強制的に思い浮かばせ、死への不安を駆り立てる圧倒的なまでの殺意。
――――それは、この世界に人として体現された、
死神、そのものだった。
儂は、思った。
――――この“死神の眼”を持つ少年は、この世界にとってとんでもなく影響力のある“劇薬”であると。
生きている限り人間は化学物質と同じだ、というのが儂の持論だ。
良くも悪くも周りと反応を起こして変化しながら、別のモノになっていく。それはあるモノには毒となり、また別のモノには薬にもなる。
――――だから、
――――こいつは、儂にとっての“薬”でなくてはいけない。
儂は自分の持っているすべてをこの華奢なガキに伝えることを決めた。

・　・　・

「さて、と」
――――身の程知らずのアカの連中が馬鹿面さげてやってきた。連中の軍服を更に濃い紅に染め上げて養殖場の餌にしてやれーーーー荒海の絶暴の組員からそんなありがたくもない依頼を受け、今俺は１０台もの装甲車を引っさげてやってきている。
あの共産主義の皮を被った欲深の魔人共の血で海を汚すのは何かと遺憾だが、そろそろ道理の欠片もわからない腐りきったおつむに血の鉄槌を下すのも悪くはない。それにーーーー新配備のアンチマテリアルライフルの実戦使用もしたいところだったこともあり、この仕事を受けたのだ。

眼前に見えるのは、今だ戦火の残り火が燻る瀬戸内の島々が見える海。
――――さて。
――――到着した。
・・・・
車谷謙三視点より　知事室。
とある傭兵からの緊急連絡。
携帯のバイブが鳴り響く。倉峰君からでした
「一方的にかつ一時的に戦いを止めた――――――――――――――――――――ですか。
――――理由をお聞かせください」
「傭兵としての経験と勘からだな。
――――ホント、糞みたいな仕事だ」
訥々と倉峰君は話し始めました。
・・・・
倉峰遥斗視点より　山口
四国を根城にしたのなら次はここを占拠するつもりだろう、と考えた俺は部隊を山口の海岸沿いの崖から狙撃隊を配置し、陸に上がったアカの連中の脳漿をきれいに吹き飛ばす予定だった。
山口と定めた理由として山口はいまだ自治を続けている数少ない都市だからである。
大阪のように海外の連中と手を結び都市システムまで完全に残して

いるわけではなく、漁師の連中や農家の方々が自発的に集まり自給自足によって自治をしているところだ。

――――もしも四国から山口の近辺の広島などに上陸した場合、この山口の自治団体に気取られる。

そいつらが逃げ出して、そこから巡り巡ってほかに情報が入ってくる可能性がある。なぜなら現在九州はアンクル・サムの“救助隊”もしくは“監視隊”がいるのだ。

中国軍は米の部隊とやりあうのは好ましく思わないだろう。だから死人に口無し。夜襲をかけての殲滅戦を行う。だから配置はここなのだ。

――――そいつ等は目立つのはよろしいとは考えないだろうから小型船で来襲するだろう。ならば大丈夫だ。

――――狙撃隊が持っているのはアンチマテリアルライフル最新モデル。対車両用の怪物ライフルだ。小型船程度の防弾ガラスならば中の人間ごと打ち砕くことができる。弾頭の先端に炸薬が仕込まれているため防弾仕様のガラスなど紙切れに等しい。

だがーーーー。

――――全てが、おかしかった。

「――――おい」

――――そのスコープから除いたその連中は、アカの軍服らしきものは着ていた。

――――が、傭兵の俺だからこそわかる。

――――精巧に作られているとはいえ、その制服は偽物だった。

「どういうことだ」

しかも、軍が使う船舶ではなく、ただのクルーザーに乗っかっている連中だった。

更に追い打ちかけるようにその運転は今までぶつからなかったのが不思議なくらい、適当極まりない運転だった。

「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

ーーーーーーーーーーーーー悪い夢でも見ているようだった。

車谷視点より

「と、いうわけだ。指示をどーぞ」
「船底を打ち抜いて沈めてください。漂着と同時に縛ってくださいね。情報を聞き出すためなら煮るなり焼くなりお好きな方法をお取りになっても構いません」
「ラジャ。特別ボーナスの用意もよろしく」
「それは依頼人の荒海にご請求を」
「ならいーよ別に。荒海の依頼通りこいつらのケツを原寸大に刻むだけだから」
「貴方も上手ですね。いいでしょう。用意しておきますから依頼通りによろしくお願いいたしますよ」
「再度ラジャ」
電話が切れた。
「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」
嫌な予感は悪寒となって息をひそめる獣の如く体内の中で息づいている
「ーーーーまさか」
それはただの推測であったが、限りなく確信に近いものであると車谷は確信した。
ーーーーやばいです。
「ーーーーっ。桐山っーーーーーーーーーーーーー！」
そう、呟いた。

倉峰にまた視点、戻る

「奴らの正体の裏が取れた。
“小爺龍”。中国３大マフィアの１角だ」
――――小爺龍。
政府筋に血が繋がっている組員を数多く保有し、中国の自由経済への方向転換をいち早く知ることができたおかげで、地価の跳ね上がりを見越しての不動産業でのし上がった連中たち。
中国政府も、経済の自由化の恩恵を得られるのは一部の高級階級層のみという政治内容を決行する為には、不満分子を抑え、鎮圧し、締め上げる暴力装置が必要であると考えたのだろう。政府関係者とパイプを持つ連中が集まり、マフィアと化した。それが小爺龍だ。
解放軍崩れの連中を大いにリクルートし、他の二大勢力を退け、ここまでの組織になった。
仕事内容は不動産業と、政府筋のコネを用いての独占的なサービス業務以外は実に簡潔だ。
毎日毎日、４０元のお給料で血反吐を吐き垂れながら仕事をしている連中たちの不満の渦を暴力で萎えさせるのが目的だ。
にっちもさっちもいかない連中たちの金融会社になってあげ、天使の祝福と悪魔の顔を使い分け、貸した金の金利をゲヒャゲヒャ笑いながら膨れあげさせ、一次欲求以外のお粗末な野心すらも起こさせないようにする。その為に大いに政府から可愛がられている連中だ。
それにしてはお粗末な襲撃だったように見えたが、どうやら外で拾われたチンピラをけしかけたみたいだ。
――――それが何を意味するか分かるか。
「奴等はあらかじめ俺達の襲撃を予期していなかった、ということですね」
ご明察。
せいぜい連中は、山口の寅さん方を血祭りにあげてほかの勢力への示威行為にでもするつもりだったんだろう。さすがに俺達の相手をするのに飲んだくれをけしかけるほど頭のネジが緩んではいないだろうと信じたい。

「――――早く、情報の出元の確認を急げ。
下手すれば嵌められてるかもしれないぞ俺達は」
――――だが、誰に？
ここで俺達に小爺龍の連中を血祭りにあげさせて得する人間は誰なんだ？
「状況推理ですが、嵌めかけたホシはほぼ特定できました」
「誰だそいつは」
「桐山将悟です」

・・・・

車谷謙三視点より　会議

「――――状況の説明をいたします。
高山のコネを使い3日前に高山と取引を行った連中の居場所を特定、拿捕いたしました。
彼らは元々ハワイアンマフィアから追い出されてチンピラに成り下がり、いえ元々チンピラ同然の無能だったから叩き出された、という口です。まあ危ない橋を渡らせるにはそれで十分だったのでしょう。彼らに危ない橋を渡らせようとしたのはーーーー半ば予想通り桐山でした」
「――――げっ、あのオッサンかよ。
――――まあ、あり得る話ではあるな」
荒海はそう呟きます。まったく自分の手を斬り落とした人物だというのに、大した胆力です。
「桐山の経歴を教えてくれ」
「過去、荒海君の片腕を切り落としました」
倉峰君の表情が固まります。
――――初めてですね。倉峰君が驚いている表情を見るのは。

まだ説明を続けます。
「１４歳のころ、暴力団員への傷害事件を起こしましてね、３年間少年院に入りました。――――信じられますか。銃を持った大人たちの集団を短刀一本で全員再起不能に仕立てあげたのですよ。それからその当時若頭だった代海蓮華が気に入り、盃を交わします。汚れ仕事の処理能力が飛びぬけて高かったみたいです。元々代海のシノギは相当無茶なのが多かったですからね。それができたのも桐山のおかげでしょう。
――――半ば伝説と化していたのですが、桐山の兵隊は本職の傭兵をも地獄にたたき落としました」
倉峰が嘆息する。
「――――ウソだろ」
私だってそう思いたい。だが、事実なのだ。
――――六年前。
木坂組最大の危機と言われた史上最悪の抗争。
――――世界最大のケシ畑を所有し、構成員６０万人を超す、アジア各国にコネクションを持つ麻薬マフィア、“トラスト＝ブレイン”そいつらが仕向けたプロの傭兵集団を、見事迎撃したのが桐山将悟の部隊だった。
「これがもとで、もう関西の暴力組織は木坂組に歯向かう人物がいなくなりました。まあ若干ひとりいらっしゃったようですが」
「俺を見るな」
荒海が、バツが悪そうに言い放つ。
とことん嫌な思い出なのだろう。
「ああクソ――――――――――――――――――あの後何年幻痛に悩まされたと思っていやがる」
倉峰が納得したように言います。
「なるほど、行方をくらませていたのはそのせいか」
「まあ、それもある」
荒海はその間何をしていたのか私にも明かしていません。

けれども以前よりもずいぶん頭が回るようになった気がします。
木坂組と抗争していたころは、ただ無条件に暴力を振り回すだけのどうしようもない人間だったのが、今や別人に変化したようにも思えます。
まず、私達の組織に所属するようという発想を持ったことと、大局観を見据える目、老練とした落ち着きを持っていた。
暴力馬鹿が桐山との闘いで現実を見据えることができるようになったのでしょう。なるほど、その片腕分程度の成長はしたようですね。
「――――調べたところ、代海と手を結んでいる企業の名の中になんとまあ、世界の戦争の油注ぎ役、“キリング・ワイス”があったんですよ。
彼らと手を組んだ桐山は、ハワイ経由でチンピラを雇い、そして大々的に販売を行った。
それに釣られて見事高山を取引に引きずり出すことに成功しました」
「悪かったな！」
高山が八つ当たり的に私に噛みつきます。気持ちはわかりますが、事実は事実です。しっかり受け止めてください。
「そして赤色の偽軍服着込んだ中国のチンピラを倉峰君が抹殺してくれれば仕込み完了です。荒海、情報元分かりましたか？」
「情報元の情報屋を締め上げたらでてきたぜ
もうすでに夜逃げの準備は万端だったようだが、いかんせん気付かれるのが早すぎたみたいだな。海外への逃亡手段と1年は暮せる金をやるからこの情報をたたき売りして来いと黒スーツ着こんだオッサンが言ってたみたいだ」
「これで確信しました。
――――桐山の狙いは、大阪の疲弊と自身の大儲けでしょう。
中国の連中をもしあの時血祭りにあげていれば、確実に我々と小爺龍との抗争になったでしょう。
――――その時に我々が大規模な武器取引を行ったと知れば危機感を募らせるでしょうが面子は守らねばなりません。どうしても戦争

に持っていくしかないでしょう。
――――その時が本番です。桐山が小爺龍に武器取引を持ちかけるのは」
「――――まさか」
「そう。中国は武器取引のしにくい場所です。自国の武器企業はほとんど国の庇護のもとにいますし、監視の強さも日本の比ではありません。ましてやあそこは政府直属の連中が子飼いにいますから。抗争は蛇蝎の如く嫌うでしょうね。国営の武器企業に堂々と買いに行くわけにも行けませんし、喉から手が出るほど奴等は武器を欲しがるでしょう。武器が手に入らないであえいでいるマフィアに天使の手をくれてやるわけです。定価の何倍もの吹っかけ価格で」
「だが、そこまで短絡的に抗争はしないだろう。たかだか外で拾った飲んだくれが殺された如き、天安門の哀れな連中ほども気にも留めやしないだろう。」
「元々木坂組は、関西に進出してきた中国人の締め出しを一番きつく行っていた組です。締め出したリストの中に小爺龍の名も挙がっていました。そもそもお互い、トリガーの引きかけ状態だったんです。そして我々から先にトリガーを引くように仕向けられた」
「なるほど――――――――――――――――じゃあ、万々歳じゃないの？結局拿捕だけで済んだんだし」
「そうはいってはいられませんよ。そもそも桐山が動き出した時点でどれだけの損失が加わるか分かったもんじゃありません。
――――こちらも動きます」
「英国紳士淑女との会合という名の決闘の前にか？冗談じゃねえぞ」
そう倉峰君がゴチます。まあ、そうでしょう
――――ですが。
「いえ倉峰君。もしかしたらその案件も同時に解決するかもしれませんよ」
「はい？」
「――――――――――――――――――――――――――――――“渡り

鳥”からの情報です」
「――――はぁ！」
倉峰君と高山君の両方が同時に声を張り上げました。
荒海君が訝しげに首をかしげます。
「――――――――――――――――“渡り鳥”？誰だそいつは」
その答えは私が答えるよりも前に、高山が声を荒げて話します。
「見つけるのにまず費用が1億ドルかかるって噂の伝説の情報屋だ。世界各地で頻出しては情報をもたらしている凶悪な化けもん。――――俺も電話でしかお目に掛かれていない。おい、どうやって連絡つけた？」
「公表はできませんが、大阪の企業トップの方々はビルゲイツもビックリの億万長者ですから。日本が独占していた商品の価格がどんどん上がっていますからね。税率も甘くしましたし、そういう人たちの協力の元ですよ。知事も捨てたものではありません」
「――――――――――――――――――――――――あんた案外ラズウェルの解決なんて望んじゃいないだろう」
「――――いえ望んでいますよ。大阪は私の最終目標の地盤です」
さて、と私は話を区切ります。これ以上の言及は避けねばなりません。
「その情報によると――――代海蓮華があの事件前にイギリス高官と会合していたらしいのです」
「――――――――――――――――――――――――――――！なっ！」
「おいおい――――――――――――――――――――――――――――」
それが何を意味するか。
提携を求めてきたイギリスが大阪を裏切ったか、そもそも最初から大阪の利権を奪うためだけに近づいたのか。
「あまりにも節操がありませんよね。天下のイギリス大帝国さんも。――――これに合わせて、何だか気になりませんか？倉峰君と決闘

を行うそのアトラス家――――伝承と合わせて生き残っているんですよねーーーーそれなら信憑性がありそうですね」
「何がいいたい」
「――――あながち、異能の力で吸血鬼を滅ぼしたというのもそこそこ信じられるかもしれないということです」
「おいおい。ヤクでもキメたか？頭の所在地は大丈夫？このままだと銀河の果ての宇宙の真理まで見ちまうぞ？なあおい車谷」
荒海が本当に心配そうに覗き込んでくる。
――――――――――――――――――――――――――――――――失礼な。
木坂組はヤクをやっても売ってもいない。
「――――私もそう思いたいのですがね。身近の所に例があるとどうしても――――――――――――――――――――――――――――ね」
「あっ、お前まさか――――――――――――――――――――――――――――」倉峰君は気づいてくれました。そうなのです。
「そうです。もしかしたら“賀北会”の事件前にもう既にあのアトラス家によって“不浄人”の技術が確立されていたのかもしれないのです」

目録１（後書き）

まだ続きます。今後ともよろしくお願いします。

目録2（前書き）

視点がコロコロ変わるのは本当に申し訳がないです。
見にくいのは作者の力不足です。申し訳がない――――――。

目録2

時は、2か月ほど遡る

目録2　攻勢

――――カラニハル・シンバ視点より、とある貴族への襲撃

「頼むよ――――――

ても構いませんか？
何で、私の両親を？」
「あの世で手前の両親に聞くんだな！」
一瞬にして少女との間合いを詰め、ＡＫを持っている右手を動かす
――――フリを行いそのまま左手のナイフで攻撃を行う。
ーーーー相手がショットガンを撃ちだそうと引き金を引きこちらに
銃口を向ける一瞬のスキをつき、つきだした動きに合わせるように
リストカット。
――――つきだしたショットガンはＡＫで叩き伏せ火線をずらす。
――――という展開になるはずだった。
相手は自分の手首の内側を守り、かつＡＫで得物を叩き伏せられな
いよう手をクロスさせて発砲した。
この動きのせいで、内側から切ろうとした俺はその動きが中断され、
叩き伏せようにも、やったところでもう一方の得物が俺の体をモグ
ラ叩き場に変貌させるだろう。
「――――くっ――――――――――――」
そのまま体を横に投げ出し、火線から脱出したのち、一回転した後
ＡＫを放つ。
が、もう既に庭の馬鹿でかい噴水の壁際に身を転がし弾幕を避けて
いる。
――――予想通り。
既に俺は、弾幕を避けられる場所のアタリをつけて手榴弾を投げ込
んでいた。
行動を先読みし、奴の散弾を避けるために体を投げ出したその時か
らーーーー手榴弾はその噴水に弧を描いて向かっていた。
――――投げ込むときは死角からだったので見られている心配はな
い――――――――――――――――――――はず、だが
出来の悪い幻覚を見せられている気分だった。
更に俺に向けて弧を描く手榴弾がそこにあったのだから。
「――――は？」

轟音。
自身の手で幾人もの爆死体を作り上げてきた聞きなれた轟音もほんの数メートル距離が縮んだだけで、こうも音の性質と音量が変わるものなのか。
――――防弾、防火仕様のコートに身を包みすぐさま横っ飛びを行う。爆風の衝撃と鉄片の幾つかは避けられなかったが、火葬されることだけは免れた。
――――それに、即興だが、新たな仕込みもできた。
自分の負傷度の確認。肋骨、鎖骨3本ずつ。
脇腹に鉄片――――はもう抉り取った。
――――まだ動ける。
――――燃え盛る炎で視界が塞がれているクセに一切の迷いもなくここに真っ直ぐ歩を進めているショットガンを持った魔女。
あの手榴弾は死角を完全についていた。
それなのにあの女はそれを投げ返すことが出来た。
何故か？
――――あの女が文字通りの魔女だからだ。
――――だが。
――――攻めの一手はある

視点替わって、クライア＝アトラス

強いですね
戦闘スタイルはＣＱＢを個人戦向けに自己流に改良した軍隊戦闘術といったところでしょうか。しかも完成度はその獣並みに高い嗅覚と合わさって極限まで高まっているようです。
――――ですが、所詮人間専用の武術です。
――――私は既にヒトであることを捨てさせられたのだから。
――――私には
――――死角は存在しない。

例えばーーーー
私の背後にある遠隔操作式爆発物があることもーーーー全部、見える。
この約五十メートル圏内において私の敵はいません。
座標視点異動能力。
五十メートル圏内であれば、私の視界は、幾重にも変えることが出来る。
俯瞰から。
地面から。
他人から。
様々な場所に自分の視界を確保させ、私は最大六つの視界を確保できる。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーヒトには分からぬ世界だろう。
３６０度視界が確保された世界。
三重、四重にも重ねあわされた視界がある世界。
それを感じることが出来る特権を持っているのが私です。
ガン、ガン、ガン！
ショットガンを三連射します。
新たなナイフを取り出すーーーーフリをしながら遠隔信管のスイッチを押そうとしている目の前の男に。
「――――くっ！」
目の前の男は愕然としています。
――――それはそうです。
――――このショットガンは特別製です。
このショットガンは内部のシリンダーに直結したレバーがある。
そのレバーでシリンダーを圧縮すればするほど散弾の拡散率が減っていき、逆に緩めれば緩めるほど拡散率が上がる。
ショットガンはその拡散度に合わせてベストな位置を確保しながら撃つのだが、この改良によって自分からその位置を決められるよう

になった。
――――その構造を知らず、さらに戦闘慣れしている目の前の男にとって今のは完全に虚を突かれることとなった。
戦闘慣れしているからこそ、この男は対応が遅れた。
――――ショットガンの拡散率を一目で把握し、その上で間合いの取りあいをしていた。
そこで、いきなり拡散度が上がったのだ。
――――対応しきれない。
軍人の戦い方は完全なるマニュアルである。
屋内戦でのマニュアル。野戦でのマニュアル
塹壕戦、市街戦、全てのマニュアルを詰め込み、そのマニュアルを有効に活用できる人間こそが“優秀な軍人”である。
なるほど、そういう意味でならこの男は相当に優秀な“軍人”であろう。
持っているマニュアルもそれを使いこなす頭も一級品。
――――だが。
それでは規格外の事象に関してはーーーーマニュアルの通じない相手には全くの無力だということだが。
だがーーーーさすがです。
横にスウェーして何とかよけきれたようですね。
ですが、鉄片で抉られた傷口に見事命中したようです。
――――それでも動きを鈍らせません。
もはや執念。憎悪をエネルギーにいつまでも動き続ける怪人です。
――――仕方がありません。
「ぅらあ！」
大きい踏込から右側に大きく腰を捻ってのナイフ突き。
ですが捻ったところで隙ができたので胸板を蹴りつけます。
チッ、という舌打ちの音が聞こえてきます。
おおかた、捻ったスキをついて発砲してほしかったのでしょう。腕を伸ばしてトリガーをひくコンマ１秒。

――――それでも十分だったのだろう。
捻った瞬間、ナイフを握ったその右手――――とは逆の左手の袖の下に仕込んだ暗器でこちらに斬りつける。
右側に腰を捻るということは、無論体軸が右に行くわけで、左腕が右に行くということ。
――――右からのナイフ攻撃に見せて、左での暗器攻撃。
ですがそれを見越して出の速い前蹴りで距離を取りました。作戦は失敗といったところでしょうか。
――――ですが。
その表情はまだ諦めていません。その人の目は真っ直ぐ私の死にゆく未来をいまだ見定めています。
――――なにか、まだ手があるのでしょうか。
「あんた――――――――――――――――すげえな。全部、見えているのかい。千里眼――――――――――――――――――――――――ってやつか？」
「――――そんな便利なものではないです。残念ながら」
「――――なるほど。そうか。
――――、じゃ、これは避けられるかな――――――――――――――――！」
「――っ！」
――――全身が逆立つような熱気を感じた後――――私は
――――周り全てが紅に染まっていくのを感じた。

視点戻って、カラニハル＝シンバ

――――――――――――――――――――――――やった。
あの魔女を焼き殺せた。
「ク――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

アーアッハッハッハ！」
「――――まだ、ですよ」
――――防弾ベストが吹き飛ばされ、だが傷一つない素肌をさらしているアイリッシュの魔女がそこに、いた。
「――――危なかったです。本当に死ぬかと思いました。
まさかさっき爆破させようとしていたのは燃料気化爆弾でしたか。
――――ですが、残念ながら私の能力には死角はありません」
「――――な――――――――――――――――んで」
絶対に避けられないはずだった。
――――さっき遠隔信管で爆破させようとしたのは燃料気化爆弾だ。
燃料気化爆弾は普通の爆弾とは違い、金属鉄片などを一切使わず熱量で“焼き”殺す為の爆弾。
――――それを手榴弾によって気化した燃料と、液化燃料が合わせたのだ。あの距離で避けられる訳がなかった。
「――――化け物と罵りますか。それも結構ですよ。実際、近からずとも遠からずでしょうし」
「はっ――――――――――――――――なにが“近からず”だ。
あの爆炎の中でも生き残れる化けもんが、何を――――――――――――――――――――――――――――――」
「――――生き残れる体を持っていたのではありません。生き残れる手段があっただけです」
「どちらにせよ化物だよ。
――――で冥土の土産に種明かししてくれないか。
――――頼むよ」
「――――もう諦めたのですか。先程までの執念はどうしたのですか」
「勝算があるから執念ってのは生まれるんだよ」
「何か勘違いしているようですね。
あんなもの、燃料気化爆弾などと言いませんよ。
小型化？あれは周り全てを焼き尽くすものだから効果があるのです。

アレの元々の特異性は何百メートルもの間を酸欠状態にして、燃やし尽くすからこそ、この爆弾は強いのです。
だけど貴方自身を巻き込みたくないから、中途半端な手を選んでしまった。
爆弾を小型化し、その代り手榴弾であらかじめ気化燃料を周りに散布する手筈だったのでしょうが、その手には乗りませんよ。
――――信管を撃たせて頂きました」
――――なんてことだ。こいつは抜き身なしの化けもんなのか。
爆破後を見てみる。
――――弱い。
邸宅ごと燃やし尽くす手筈だったのに――――――！
現在燃え盛っているのは中庭のせいぜい三分の二程度だ。
精度において信用性の薄いショットガンで、あの爆破までのコンマ一秒で正確に信管を打ち抜いたのだ。
――――結果、爆破の初動が遅れーーーーとはいうものの俺が実感できない位の一秒にも満たない程度――――であろうが、時間を稼げ、効果範囲も狭くなった。
その秒数でもこの怪物には十分すぎる時間だったのであろう。
「――――ではこちらの質問に答える番です。
――――何故、アトラス家を？」
――――なんてこった。
――――驚いたことにその眼は加害者の物ではなかった。
――――本当に、知らされてなかったのか。
「はん。
――――簡単な話だ。アンタみたいな怪物を創り出すためにアンタの親が政府と手を組んで人攫いを始めた。
――――そこには俺の妻の姉の名も、リストに載っていた。
――――なんでそんなリストを仕入れることが出来たのかって？
情報屋と情報交換をやったのさ。
さ、殺せよ

――――もう、いい。どうやら俺は人よりも生きるのに何十倍と労力がかかるらしい。もう、疲れた」
「――――一応言っておきますが、私はそんな言葉に憐憫の一欠片でも感じれるようなまともな感性を持ち合わせていませんし、問題の解決手段をすぐに暴力に持っていく人間も軽蔑します。
――――生き残る気力があるのであれば協力してください。ロクな親ではなかったですが私はアレの子です。責任の一端は私にあるのでしょう」
憂鬱そうにその少女は呟く、だがはっきりとした怒りをその眼には内包されていた。
「――――とりあえず、――――このことに関連してそうな人と情報交換をしましょう。心当たりは？」
――――渡りに船だな。
俺の方も覚悟を決めた。
「分かった。アタリはある。
――――えーと」
「クライア＝アトラス。クライアで構いません」
そうして、クライアはこれからの計画を話した。

車谷謙三視点より　とある傭兵との電話での会話。

「――――それで？」
「一足早く確信が付いた。クライア＝アトラスは不浄人だ。
――――ビンゴだな」
「何故確信できたのでしょうか」
「腐れ縁からの情報。
――――燃料気化爆弾の信管を打ち抜いたらしい。人間業じゃない」
「――――そうですか。いえ、わかりました
とりあえず方針を固めました」

「――というと？」
「桐山が以前持っていたフロント。今休眠会社化しているやつを発見しました。
――一応、私の会社でもありますので犯罪行為ではありません。連盟への説明ならそれでつくでしょう。
――今から、荒海君と共にそこに行ってくれませんか？」
「なんで荒海と俺なんだよ」
「――ドンパチ対策です。実はそこは大阪ではありません。京都府に行ってもらいます」
「おい、それってーーー」
「――桐山の統括地域です」

・・・・

クラウス・セル視点より　旧東京スカイタワーにて　コード３４“ｗｉｌｌ”との対面。

元東京スカイタワーから見える景色は特に変わらない。
高度４００メートルからの視点からでは人の姿など地を這うアリほどにも見えないはずなのに、今この首都の中に人間がいないという事実は、はっきりと分かる。
やはり生命の躍動というのは“いる”と実感できているのなら自然と感じるものなのだ。
事実、人が全員死んでいったというだけでまったくこの東京の景色は変わらないというのに、どこか落ち着きがないのだ。
――ま、そんなことは心の底からどうでもいいのだがーーーーこのタワーの４００メートル地点、そこには部屋があった。
そこは網膜スキャンによってしか開かない核シェルター用の防護扉に守られた部屋だ。

――――そこにはアヴァロンがあの放送で言っていた“ここの技術をアップグレードさせる技術”があった。
――――網膜スキャン、完了。
機械音が鳴り響き、私はその“技術”と対面する。
――――そこには幾重にも連なる集積回路とモニター、そしてその中心でずっと目を瞑る少年がいた。
彼が“東京の技術をアップグレードさせる技術“であり、栂曰く”異形種“と名付けられたコード３４”ｗｉｌｌ“である。
――――“ｗｉｌｌ”は“予測”の能力に特化した不浄人である。
――――そう、“特化”だ。
本来、運動機能に使われているはずの脳の機能がすべて思考能力に再配置されている。
そして、常人を越えた演算機能と思考能力の方向性は全て“予測”することであるのだ。
――――そして、その思惟情報を脳から読み取り、この電波塔から発信する。それが私の役割だった。
――――光栄に思っていますよ。
なにせ、この少年は私達の光そのものなのだから。
行く先も見えない、死すら不確かな私たちに確かな未来への指針を与えてくれた。
私たちがいまだ死に損ないながらもここまで生きながらえて来れたのは“ｗｉｌｌ”のおかげだった。
――――そう。
私たちの畏怖の証だった栂含む“賀北会”の創造主を焼き殺したのも、“ｗｉｌｌ”がそいつらに処分されそうになっていたからだ。
――――その創造主を殺す時ですら、笑いを堪えることができなかった、どうしようもない私達でも“ｗｉｌｌ”は常に道程を照らしてくれていた。
そう。
“ｗｉｌｌ”は私たちの所有する技術であるが、間違いなくそれな

くて私たちは生きていられないモノ、である。
例えるならスペースシャトル搭乗員にとっての無線端末器のようなものだ。どこかおかしくズレている私達が唯一信用できるものなのだ。
そうして今日も私は“ｗｉｌｌ”の思惟を読み取るのだ。今日も明日も明々後日も変わらない。それが私の“ラズウェル”での私の役目なのだから。
「――――わかった」
思惟の読み取りを終わると、私はメンバーに連絡をつける。
「――――そう。次の“ｗｉｌｌ”の指示、出たわよ。次は、京都よ」
私は、“ｗｉｌｌ”の指令を伝えた。
電話からは下卑たダニ声が。

・・・・

時枝鈍輝視点より　とある傭兵との対談

「――――５万。即金だ。早く払え」
「あいよ。わかってる。ほら」
倉峰遥斗　金払い良し　面倒なくて中々
俺はこうやって記憶のキャビネットに必要最低限の情報を糞でも詰め込むかのように嫌そうに嫌そうに保管しておく。
「車谷から紹介してもらったが中々だ。本当にコイツを初めて握った時と同じ感覚だ。グリップが自然と手に吸い付いてくる」
はいはいはいはい。御託はいいからはよ帰れ
こっちは人の声聞いているだけで吐き気が催すんだから。
――――いまこの倉峰という怪しげな傭兵の手にはベレッタ８０００とトーラス・レイジングブルが握られている。

俺が今行った仕事は銃の整備。使い方が荒かったようで握り口はひん曲がってるは銃の塗料は剥げているはで目の前の男の頭の方にこそドライバーをねじ込みたい気分だったが、遊底の整備と内部の掃除はまめにやっているのは整備していてわかったため、怒りをどうにか抑えることができた。
俺は人間のことなどロクに覚えたくもない。
記憶能力の無駄使い以外の何物でもないからだ。だから一切の情報を脳の中には入れたくはないが、悲しいかな、そんな糞のような記憶でも日々の飯のタネには必要なものなのだ。
――――それに記憶とはさらに厄介なもので最悪なまでに人を不愉快にさせる天才というのはこの世には存在しており、そういった人間の記憶は寄生虫の如く脳の中にこびり付いて、中々頭から消えてくれないものも確かに居やがったりするのだ。
――――そいつはーーーー
「よーう。時枝君。また来たぜ」
ーーーー高山九山。
下品　下劣　そしてーーーーとにかく金汚いその性根。
蹴とばしても殴り倒しても懲りずに1割まけてくれとしつこく頼むくそったれ武器商人。
「――――――――――――――――――――二度と来るな。そうでなければ手前の頭にマグナムをぶちこむ、と忠告をしなかったか？
――――ああ、してなかったか、残念だ。俺はこれから忠告してもいないのに人を殺してしまう極悪人に成り下がっちまうんだな」
そう静かに言うと。
取り出したのはＭ７２ＬＯＷ――――火力が少ないとはいえれっきとしたロケランである
「え、それマジ？」
高山の顔が引きつる。ははは。冗談でこんなもんぶっ放せるほど、こちらも景気がよろしくないんだよ。とっとと死に失せろ。

「吹き飛べ」
――――神戸市内の廃工場内に轟音が鳴り響く。
そこにはもう高山の姿はなかった。
「――――ちっ、仕留め損ねたか」
――――左方に身を転がし、爆風から逃れ、飛び散る鉄片からは近くにあったチタン製の廃材で身を隠した。なるほどさすがに修羅場を渡り歩いた伝説の官僚だ。そのゴキブリ並みの生存本能が最初から備わっていれば、“君子危うきに近寄らず”の格言をきっちり守ってくれたんだろうと思うのだが。
倉峰は愉快そうに口元を歪めているが同時に目が微妙に吊り上っている。派手な爆発をあのいけ好かないオヤジにぶっ放すのは大いに結構だが、それはちゃんと関係のない人間を巻き込まない程度の分別とおつむを備えてからにしろよ――――そうその表情が物語っていた。
どうしてこうもこの町の人間は自己中心的な人間が多いのだろう。
ホント、いつかＩＣＢＭをこの町にたたき落としてやると心に決めた。
「――――――――――――――――――――」
倉峰がぼそりと呟いた。
「腕は確かなのにここに皆来たがらないわけが分かったよ。
――――どうかしてる」
そんな戯言をこいつはほざくのだった。

・・・・・

――――四日後、京都
倉峰遥斗視点より　とあるワゴン車の車内。

「――――一つ、聞いてもいいか、荒海」
「なんなりと」
「――――何であの狐が抱えている案件を俺達が解決せねばならんのか、ということについてだ」
現在、俺達は車谷が用意したオンボロワゴン車に乗って愉快痛快血塗られた珍道中を走っているのだ。
――――いや、揶揄ではない。
本当に血塗られているのだ。
大阪の城壁を越えればそこは喰いっぱぐれたチンピラの殺し合いの跡や、それに群がる猛禽共などなど。いくつもの物語が記してきた人間の“末路”の世界があった。
人間は社会的生物であるとはアリストテレスの言葉か。まあ、社会性を失った人間ほど薄汚いものは確かにないが。
「あー。なんだほら言うじゃねえか。“迷える子羊よ、隣人を愛しなさい”ってな。
キリストの言葉か」
「所詮裏切られて殺された負け犬のありがたいお言葉か。俺にとって隣人ってのはナマコを二枚重ねしたような極厚の唇と皺まみれの脂肪に彩られた性悪ババアや、虱まみれの小汚い発狂者と同意語だ。愛せる人間がいるとしたら人類至上全体愛護団体式ファシズムが登場したと泣いて喜んで小銃をぶっ放すよ」
「凄い所だな。お前何処に住んでいるの？」
「そういう奴が隣人であるところ」
「どーだっていいんだよ。ふざけんじゃねえよ。なんで俺まで」
レイナーが叫んでいる。
オンボロワゴンがエンストするたび“いつか車谷と一緒にこのワゴンを圧縮機で圧死させてやる”と喚いていたのが早１０分
軍用戦車と装甲車を乗りこなしてきたレイナーにとって自家用車自体許せない物であるにも関わらず、乗せられているのはこのオンボロ。殺意がわいて当然なのだ。

「何故灰狼衆の装甲車を使わない」
「目立つから隠すのに不便。お前はノコノコ敵地に車で入るつもりだったのか。
――――京都に入る前には降りるぞ。
これだけオンボロならば放置されていても不自然じゃない」
「――――さて、そろそろだ。
ここからは歩きだ。よかったな」
降りた。
――――だが
異変。
このタイミングで。
この状況で。
「――――――――――――――――――――――――――？」
――――いま、微かだが振動音がした。
これは――――――――――――――――――――車？
だが次にははっきりとエンジンの駆動音が。
そして、
その存在に気付く。
「――――伏せろ！」
無意識にそう叫んでいた。
するとーーーー
遠方から飛来したＲＰＧ弾頭がオンボロを吹き飛ばしていた。
すぐさま射手をスコープ付き小銃で仕留め、――――敵の数と種類を確認。
――――全員、統一された黒スーツを着込んだ連中。
――――桐山組だった。
「――――荒海」
「――――分かっている」
その言葉は、ここで起こっている状況が意味すること、これから自分が起こすアクションその両方を了解したということだろう。

――――既に俺達の存在は桐山にばれたことと、
――――口封じして時間を稼ぐため、こいつらを殲滅すること
その両方を。
俺はＭ８０００を手に取り、
荒海は漆塗りの短刀を取り出す。
そして、レイナーは戦いは給料のうちに入っていないとばかりに今だ燃えているオンボロの陰にへたり込んだ。
――――狩りの始まりだった。

視点、移ろう。

荒海のその動きをどう表現すればいいのか。
――――少なくとも、目の前の黒スーツから見れば――――弾けた。
そうとしか表現できなかった。
踏み込んだ勢いで、蜘蛛の如く地を滑走。
踏み込み先には小ぶりのクレーターが出来上がっており、そのスピードは蜘蛛と比較できるのかさえ怪しいものだ。
――――その滑走するモノの風圧だけで、黒スーツは攻撃する意欲をなくした
――――と同時に、まともに血潮を流す頸動脈までも寸断された。
――――荒海は冷め切った目を他の獲物に向け、また、弾けた。
擦れ違いと同時に黒スーツの頸脈を断ち切り、血だまりの山を作って行く。
恐ろしいことにこの惨状の中でさえも荒海は返り血の一滴すら浴びていない。
退屈とでも思ったのだろうか。こんなセリフを吐いた。
「――――まあ、時々は使ってやらないと技が腐るな」その言葉と共に。
――――荒海の動きが変わった。
弾けたのではなく、気配すら残存させずに間合いをゼロにする。瞬

間移動、そういわれても納得できる速さ。
――――それを見せつけられた男はいつの間にか地に伏せ、血だまりを作っている。
全身の腱という腱を断ち切られた男は、痛覚が訪れる前にその生を終えた。
残る獲物はーーーー後二人。
既に拳銃を構え、撃とうとしている男に対し袖の下に隠してあった軍用ナイフを投げ、手首を断ち切る。
呻き、うつむき下に向いたその男の顔面が、
――――弾けた。
間合いを詰んだ荒海の必殺の膝蹴り。
それは小ぶりのクレーターを地面に増設しながら放たれた。
――――弾けた男は舌を噛み切って死亡していた。
――――後一人は、
カッ！と目を見開いた荒海が
――――姿を消した。
荒海は既に後一人の黒スーツの後ろを通り過ぎていた。
――――黒スーツの胸に、異形の“円錐”を増設して。
黒スーツは、何も感じ得なかった。
――――その身を震わす激痛も、
――――刃が通った感触さえも。
何も感じ得なかった。
――――余りに甚大な痛覚の奔流が来ると、人は何も感じえないのだ。
――――体の力が抜ける。
意識が遮断されると同時に、その黒スーツの生命の灯は、消えた。
――――それは、
――――湖面より静かな死だった。
それを演出した隻腕の男は、
「ーーー

ー」
――――先程の得物とは違う、刀身が先端にかけて段々と細くなっていっているスティレットをーーーー袖に仕舞った。

同時刻、倉峰遥斗。
――――まさに“死神”だった。
倉峰が放つ弾丸は何の間違いもなく相手の脳漿を吹き飛ばし、自身は必ず弾丸が放つ真っ直ぐな軌跡の外にいる。
「ーーーーーーーーくそ！どうなってやがる！」
「どうもこうもねえ。
――――手前等とは見ている世界が違うんだよ」
ガン！ガン！ガン！
悪態をついていた黒スーツの後ろに蜃気楼のごとく現れた倉峰はＭ８０００の４０口径弾を３連射させた。
瞬時に黒スーツの脳漿と生命を消し飛ばした倉峰は新たに定めた獲物の死角に動き、撃つ
――――その動きに一切の無駄はなく。
――――どこまでも効率的に、相手の生命を刈り取っていく。
が、
――――倉峰も遂に、興が冷めてしまった。
故に
――――３秒で、残りの黒スーツを抹殺することに決めた。
――――久しぶりに体全体を支配する感覚に酔いしれる為に。
殺戮する為に。
相手への憐憫を封じる為に。
――――意識を脳髄の果てまで押し込む。
――――自己を抑制するためのプロセスを全て脳内からデリートさ

せる。
――――“天経”を開いた。
――――その手に握られているのはＭ８０００でもなく、Ｈ＆Ｋでもなく
――――銀狼の刺繍が入った、白銀の長刀だった。
――――倉峰の口元が、歪む
どこまでも不愉快そうに。
その表情が、倉峰の仮面が一瞬外れた瞬間だった。

レイナーは火の陰に隠れ、その発達した聴覚が倉峰の愛刀が抜かれた金属のこすれる音を捉えた。
「――――――――――――――――――――哀れ」
黒スーツに訪れるであろう未来に一人、哀悼を捧げる。
――――――――――――――――――――――――――――まあ、楽には死ねるとは思うがな。
それでもやっぱり、ホラ。
人間、気づかないうちに終わってましたってな終わり方がどの世にも語られる間抜けな死に方ではないでしょうか。
つまりは、倉峰が刀を抜く、ということは、
――――自身の生命が刈り取られているという実感もなく、
――――その全身に奔る激痛も感じることもなく、
――――ただ圧倒的な死神の恐怖と暴力に自身の未来を投影し、絶望の２文字を頭に走らせるだけだ。

レイナー・ハスウェルト視点より

「いやー。片付いたな」
「まったくだ」
お互い満足げにそんなこと言ってやがる。
お前達
「冗・談・も・大・概・に・し・や・が・れ！」
キレた。いろんな意味で。
「手前等はなんだ！車谷に言われた仕事の内に巨大ブラッドバスを作れなんて言う内容がどこにあった！お前等は敵を見つけては虐殺しなければ気が済まない虚無主義者か！おおぉ！」
「がなんじゃねえよレイナー。
――――もう、潜入は無理だ。
――――ここで派手にぶっ殺してエイミー・ソルジャーズの連中に動いてもらうさ。
――――陽動作戦だ」
「――――――――――――――――――――どうやって」
「こうやってだ」
――――そこには、
あらかじめこの状況を予測していた倉峰によって、手配された黒コートの傭兵が装甲車に乗ってやってきていた。
そこで、倉峰は何事かを運転手に呟き、そして、装甲車は離れていった。
「――――急ぐぞ荒海。時間稼ぎも2日が限度だ。それ以上はかけられない」
「分かった」
「――――あの狐のことだから俺を試したんだろうな。本当にいつか殺す」
レイナーは改めてこの若い傭兵団長の洞察力の高さに唸った。
――――倉峰の言うとおり、車谷は試したのだろう。
これくらいのアクシデントあらかじめ予測しておけと。
――――その意図を指令された時点で感づきすでに自前の傭兵を手

配していた。
ーーーーだがそれは、
「おい、レイナー。早く行くぞ。今度はサボらせんぞ」
その後の言葉は胸の内に仕舞っておくとしよう。
これから起こる惨劇の立役者の一人に、自分の名が挙がっていることを嘆く言葉を紡ぐために。

倉峰遥斗視点より　到着

ーーーー

まれる。運び込む先は警察が介入しがたい有力代議士のバックがついたゼネコン関係のフロントにするのだ。晴れてこうして諸々の糞をきちんと便所に持って行って洗い流し、掃除をゆっくりと行うことが出来るわけだ。
――――で、代海が事件前、イギリス政府高官と会っていたと。
国内の政治家ならいざ知らず、外国の高官ともなればそれはそれはマスゴミ大喜びのビッグニュースだ。
それこそ、“渡り鳥”の介入なくしては情報が得られないほどの。
――――ここに、その高官に会っていた理由があると踏んだのだ。
知られてはならない糞情報のタンクであるこの会社に。
「――――さて」
古ぼけたビルの中に入る。当然、鍵は閉まっているので荒海のヤクザキックによって蹴破られたドアの先にあるのは、今だ手が付けられていない埃っぽいオフィス。その一番奥にでん、と鎮座なさっているのがやたらと見栄えの良い壁に直接組み込まれた大きなメイン・コンピューターだった。
「さて、じゃお手並み拝見だな時枝君」
３０万円分の働きはしてくれよ、時枝製ツールメモリー君
レイナーに指示をだし、ツール入りＵＳＢを刺し込む。
「ま、後は気楽なもんだな」
次々と出てきては消えるデバックをぼぉ、と眺めながら俺は呟く。
――――が、納得はしていないが理解はしていた。
――――自分には安息の時間などロクに用意されていないということを。
「――――あー、クソ」
――――聞きなれた装甲車の走行音。
――――そして、もはや慣れてしまった全身に奔る悪寒。
――――死にたくなった。
敵襲だった。
「おーい倉峰。エイミー・ソルジャーズの連中はサボり癖がついて

いるのか？大した働きだね」
「――――違う。桐山じゃない」
荒海の嫌味に対し、俺はそのままの感想を述べる。
「――――荒海！こいつ等はーーーー」
俺は憮然としながらも自らの確信に近い感想を口にする。
「――――“キリングワイス”の腐れ傭兵共だ！」
――――俺は、
世界の戦争の油注ぎ役である史上最悪の民間軍事会社の名を答えていた。
「ああーーー

「レイナーとコンピューターの世話を！」
「お前一人で連中の相手をするつもりか！」
「あんなあけっぴらで弾幕を張られた場所、お前のスタイルじゃ不利だ！アホ面さげてここに入ってきた連中を血祭りに上げとけ！」
ガン！ガン！
さらに二人撃ち殺し隣のビルに窓ガラスから飛び入る。
最初、連中は代海のオフィスを優先しようとしたがーーーー俺が飛び込んだビルの三階から見える対物ライフルを目にしたときーーー優先度を繰り上げてこっちに来た。
とりあえず3発ほど威嚇として撃ち装甲車を打ち上げ花火よろしく吹き飛ばすと、3分の2ほどの連中がこっちに来てくれた。
――――よし。
荒海。レイナー。
残りは頼んだ。

・　・　・

荒海都視点より　発見

「大分引き付けてくれたようだな。
――――レイナー。どうする」
「どうするもこうするもーーーー」
レイナーはーーーーどこからかブローニングM2機関銃を取り出す。M2重機関銃とは焼夷弾やら徹甲弾やらまで弾込めができる、別名ビッグママなどと現場兵士から呼ばれているとてもとても強力な火器のことだ。
というか、元々戦車に括り付けていたもので、歩兵が使うには三脚が必要不可欠なのだが。
それを片手で軽々と持ち上げているあたり、“灰狼衆”はロクな鍛え方をしていないように見える。

「やるしかないだろう！」
――――オフィスのドア付近に血溜まりが出来上がっていく。
分間２００発の弾丸を放出する重機関銃の弾が玄関先を血しぶきによる蜃気楼を形作っていく。
――――なんとも派手な戦い方だ。
だが、理にかなっているともいえる。
――――レイナーは不浄人としての力により心臓部と脳以外、傷ついてもすぐ再生する体質なのだ。
よって、高い火力で近づけさせず、肉を撃たせようとも構わずゴリ押しの戦闘を行うことが性に合っているのだろう。
「荒海！」
かろうじて聞こえる。Ｍ２の駆動音のお蔭でロクに聞こえやしないんだ。俺の聴覚が人並み以上でよかったな。
「俺は多少撃たれても大丈夫だからこのコンピューターのお守りをする！
――――お前はここを出てこの隊を率いている隊長を始末しろ！」
――――――――――――――――――――無茶いうなぁ、クソッタレ。
だが、たしかに今この状況を一変させるにはそれしかないだろう。
全員、結構な統率力を持っている。これはきっちり上の指示が下まで届くシステムがあるからだろう。
仕方がない。
倉峰が飛び出た窓から脱出する。
――――窓から外に出た瞬間、俺は視覚から集まる情報の全てを脳内に組み立てていく。
地形、建物配置、敵数――――――――――――それらの情報から浮き彫りにされていく司令官の居場所を論理的に解明していく。
適当に一人の頸脈を裂き、無線機の確認を行う。
タイプからして半径２キロ圏内といった所か
――――――――――――――――――――――――よし。

条件から、居場所は４つに絞られた。
とりあえず。
一番確率の低いところを当たるか。
たいてい、こういう海千山千の腐れ傭兵の中で上まで這い上がって来れる奴は、
――――脳内まで腐った偏屈狂が多い。
倉峰やレイナーを見ればわかることだ。
そういう奴らはマニュアルの裏をかく。
そう判断した俺は、絞った４つの可能性の内一番可能性が低い場所に向かった。

――――いやがったな。
「なっ――――――

俺ならばーーーー高校生位、そう思ってしまうほどの顔だった。
「――――まさかもうここまで来れるとは。
倉峰さんとレイナーさん以外に貴方がいましたか。これは誤算でした」
ゆっくりとその少年は立ち上がり、その顔面にふさわしい無邪気そうで、どこまでも純粋な笑みを浮かべて、
「ですがーーーー貴方に私を倒せますか？」
少年も俺に応じるように、ナイフを取り出す
――――上等だ。
――――殺してやるよ。
足元に重心を傾ける。
これだけの操作。
それだけで俺の“靴”は圧縮されたガスを捻りだす。
そして、そのガスが生み出す反作用をそのまま体全体に流動させ、傾けた重心の方向にそのエネルギーを放出する。ほんのコンマ一秒にも満たない作業だ。
だがその刹那の時間に、心臓部分をごっそり抉り取る技が完成する。
ようするに寸勁の応用――――――――――――――――――――はおこがましいな。しょせんマガイモノだが途中までの原理は同じ。
その原理を振り返る。
足元に溜めた力を肩、肘、手を通して最終的には重心で傾けたその先の先――――つまりスティレットの先端に開放する。
無論俺は寸勁を元々やっているわけでもなくまたロクに格闘技もしていない。ナイフ術はすべて実戦の中で培った我流だし、多分、世界一ナイフに通じている男がいるとするならば、それはおそらく俺ではない。
――――だが、世界一重心感覚を変動させられる男、という奴がいたならば絶対ではないが俺である自信がある。
物を押す時、普通、大きいものを押す時体を押す方向に傾けるよな？

それはそっちに重心を傾けると体重が乗った分押しやすくなるからだ。
――――その重心を傾け物を押す、という行為が俺にとって最も得意な事なのだ。
その理由は二つある。
まず、この片手しかない腕。
元々あった左腕が紛失したことにより重心のバランス感覚が狂ってしまったのだ。
だってそうだろう？腕が折れた人形はちょっと押しただけですぐ倒れる。人間もまた同様だ。
だが重心がずれたということは、その分重心を傾けやすくなったということと同義であるためである。これが一つ目。
２つ目はーーーー俺の、脚。
古武術をやっていたどっかのクソジジイが俺の脚を“鳳脚”とか言ってたっけ。
俺の脚の筋肉と腱はゴム以上の伸縮性がある、
本来人間ではありえない脚をしているらしい
その脚は足にかかる負荷を簡単に受けてくれる上に、重心が傾いてもバランスを取れる程の強度を持っている。
かくして俺はこの二つの力で、足装具“ヘルメス”を使っている。
重心を傾け、足にかかる負荷を増やせばガスを噴出する、足装具だ。
これのおかげで、限定的ではあるが自身のスピードを跳ね上げたり、ジャンプ力の向上、さらに言えばジャンプ中の方向転換まで可能となった。
そしてーーーー今このクソガキにやろうとしている技は、このヘルメスの力を利用したものだ。
高圧ガスを噴出した際に出来上がるエネルギーを、脚を通し、腕を通し、そしてーーーースティレットにまで持っていく。
こうしてーーーー心臓部に円錐型の風穴を開けていたのだ。
ついでに、何故スティレットに持ち替えるのかというと、ナイフだ

と負荷に耐えられず折れてしまうのだ。だから、徐々に細くなっていく形状を持つスティレットのほうが、力を効率よく伝えられるのだ。
――――そんな剣呑な技を、自分よりもさらに若い少年にぶつけようとしているのだ。
――――それは、
この少年を見た瞬間だ。
――――桐山と対峙した時と似たような悪寒がしたからだ。
それを振り払うために、今、自身最強の技を早々に使い、葬り去ろうとしているのだ。
――――そして、
――――俺は自分の肩口から浮き出る赤の軌跡を、見てしまったのだ。
「――――――――――――――――――――なっ！」
俺の眼前に確かに居た少年は、
――――きれいに存在が消えていた。
そう。
――――消えたのだ。
少年のカタチをした物が、砂塵で吹き飛ばされたかのように粒状になって。
まるでマジックか夢でも見せられている気分だった。
――――――――――――――――――――――――――――――――おいおい。
――――――――――――――――――――――――――――――――こいつぁー、どういうことだ。
そして、信じられないことに、
自分が感じていた少年の殺気も気配もそして実際のその姿までも、
――――俺の後ろに確かに存在していた。
「――――なんだ、お前」
「僕がなんなのかを証明する証なんて数えるほどしかないし、説明できるものなど唯一つだ」

悪戯っぽい笑みを浮かべた少年は口を開く。
「僕はアルカ＝アトラスだ」
・
・
・
倉峰遥斗視点より　激戦区
そろそろ、弾数がまずいな。
現在、このビルに立て籠もってからまだ十分もたっていない。
――――天経を開くか？
だがやったとしてもここでやるべきことは時間稼ぎである。
時間稼ぎで限定的な時間内での超人化の効能など出してしまえば敵はひと時去ってレイナーの所に行くだろう。
――――アンチの弾丸なぞ雀の涙ほどしかない。
――――レイナーからの報告で荒海はすでに頭を殺りに行った。
それまでの時間稼ぎなのだが。
「――――ちっ」
ここで数十人単位の連中が一挙にやってきてしまった。
――――まずいな。こいつらの撃退でもう弾薬は消え去ってしまう。
心中で舌打ちをしたその時、
――――爆音がした。
「――――あっ？」
――――その爆音は、
――――入り口付近の突入部隊をきれいに火葬していた。
――――そして、
――――その火葬人は、
――――こちらに向け親指を突き立てている
そいつは、
――――見慣れた腐れ縁の顔だった。
「――――――

―カラニハル？」

――――視点戻って、荒海都。

「――――えっ」

少年の顔が驚異に歪む。

オレなどもはや思考停止状態だった。

キリングワイスの司令官殿がなんの因果かアトラス家に縁があるものだったのだ。

だが、いままさに俺と同じように思考をストップさせているのは、

――――紛れもなく、少年も同様だった。

――――更に現れたもう一人の部外者。

俺とこのクソガキの攻防の間に現れたと思われる部外者は、女だった。

アルカと名乗った少年はその女に声をかける

「――――クライア？どうしてここをーーーー」

「黙ってください」

その女は奇妙な形状のショットガンを、少年に向ける。

――――こちらの背が底冷えするくらい、圧倒的な殺意だった。

「――――なるほど」

少年もまた笑って、それに応じる。

――――女の名前はクライア。つまりーーーー今度倉峰が相手にする怪物一家の長女だ。

――――――――――――――――――――――――どうなってやがるってんだ。この状況。

視点回帰　倉峰遥斗。
倉峰もまた、
意外すぎる闖入者に頭を混乱させているところだった。
「――――カラニハル！」
「よ、ハルト。元気だったか？」
だが、一瞬で余裕を取り戻す。“何故”の思考を一時的に完全ストップさせる。
「いやぁ、怪物女に食い殺されたって部下がいっていたんだが」
「死んでいたらどうやってクライアのことお前に報告できるんだよ」
「クレイモア地雷踏んで生きていたお前だ。女に撃たれて死にましたなんて言う笑える最後にゃならないだろう？」
軽口をたたきながらもカラニハルは俺に弾薬を手渡す。
――――――――――――――――――――――――――――少なっ。
「ケチんなよ」
渡された弾薬の数を見て、そうぼやく。
「黙れ化けもん。お前は刀一本でどうとでもなるだろう。こっちはただの人間だ。我慢しろ」
ケラケラ笑って侮蔑を込めてこう呟く。
「いつか刻む」
「脳天吹き飛ばす」
恨み言がこの会話の最後を飾ることとなる。
手榴弾のピンを外す音。壁際から。
――――もうきやがったか。
投げ込もうとした瞬間。
――――爆発。
カラニハルのスチェッキンの乾いた音と共に
――――投げ込もうと壁際から手を出したその時には、既にカラニハルは手榴弾を撃ち抜いていた。

轟音が鳴り響く。
すぐに廊下は鉄片付きの火葬場となる。
「――――火葬屋の到着はまだだぞ。残念ながら」
「脳味噌から先に灼熱にたたき込んでやる」
残酷なことを笑顔で言い終わると、俺は刀を抜く。
――――来た。
――――手と刀が、
――――一体化するこの感触。
既に体の脳が、神経が、手が、
――――精神さえも。
俺が握った刀の存在を体の一部として認め、体自身もそれに対応してくれる。
――――天経が、開いた。
ちょうどよく、レイナーからの無線が入った
もう、データの抽出を終えたという報告だった。
――――もう、時間稼ぎの必要がなくなった
――――殲滅させる。
三階の部屋の扉から俺は駆け出る。
予想外の行動に突入部隊の面々は一瞬虚を突かれたようで反応がおくれた。
――――その一瞬で十分。
すでに抜刀の準備を終えた俺はそれを抜き放つ。
――――その刀の軌跡は、
――――白銀の反射光を、
――――紅色に染め上げた。
――――コンクリートの壁ごと首を刎ねられたその男たちの顔は表情すら変わっていない
俺は虐殺路を辿りながらも自身のこの能力について回顧していた。
“天経”

これは勝手に俺が名づけた俺の“脳”力の名称。
――――俺の脳は、幼いころに少しおかしくなってしまった。
何てことはない偶然だ。
だが、ある意味で必然だったのかもしれない
――――幼少の頃、父親をその手にかけた時に、何かがおかしくなっていた。
集中すればするほど時間の流れが遅くなっていく感覚。

――――体の隅々に蔓延る無数の神経。
――――それを束ねる大元の幹のような神経が、人間には存在しているらしい。
俺はその存在を特別に認識することが出来るようになった。
――――揶揄ではない。
事実、その存在を認識するようになってから肉体の個々の“存在価値の強化”ができるようになった。
――――筋肉の収縮運動の促進。
――――視神経発達による動体視力の上昇。
――――嗅覚、聴覚の鋭敏化。
――――運動神経促進による運動能力の増加
この能力の向上は――――天経の発動と同時に脳の命令信号の伝達スピードが通常の数百倍に跳ね上がることによって行われる。
それが、前述の肉体機能の個々の存在価値の強化に繋がっているのだ。
――――そして、
――――この技にも。
來山須岳陽明流抜刀技“非業”
全身を振動させ、全ての力を抜刀と共に解放する。集めた振動エネルギーを刀の先にまで集束させ、肉体の全神経、全機関の動きを合致させ抜き放つ腕に収束させる。

それを、今使った。
この傭兵共に。
――――特殊合金ですら撫で斬りにできたのだ。人間が喰らって無事なわけがない。
抜き放った刃は音速を超え、凄まじい衝撃と共に、ビルの壁ごと切り裂いた。
――――意識が、
――――肉体が、
――――全身を蔓延る神経が、
果てない殺意に凝縮されていく。
殺意が殺意を、敵意が敵意を、俺の目に映るカタチの無いそんなもの達が、殺せ殺せの大合唱を始める。
ある意味で、
前述の諸々の能力の向上なぞ、この呪いを発現させるための要素でしかない。

俺には敵の姿も放たれる弾丸すら見えていて見えていない。
そこにどす黒い殺意と自分に向けられた敵意を見るだけ。
皆さんはこのような感覚を感じたことがあるまいか？
――――音が、視覚としても見える。
――――匂いもまた、音として聞こえる。
――――視覚からの情報もまた然り。
共感覚、という奴か。
まさにすべての五感が溶け合っている状態。
撃鉄音に色が見える。
硝煙の匂いに音を感じる。
劈く悲鳴、怒号、弾丸、血。嗅覚と視覚と聴覚で得た様々な情報が等しくすべての感覚に共有されていく。
全ての情報を得る媒体が一体化している世界に今俺はいる。
――――色が音に、

――――匂いが色に、
――――視界が音に、匂いに
気が狂ったとしか思えぬ世界。
五感が混ざり、ヒトには理解できぬ至高の世界。
だが、
そんなもの、
俺にとっては、
ただの混沌そのものだった。
気が狂ってるのかと思う。
理解できるか？
匂いも視界も音も何もかも何もかも、明確な情報の軛から解放された世界。
それはもう“理解できない”の一言しかない。
――――だが、結局それはその世界から解放された後の俺の感想でしかない。
そして、
その世界を振り返るマトモな俺はこう思うのだ。
そんな混沌とした世界の中で信じられる、言い換えれば確実にはっきりと理解できるものは――――自分に向けられた悪意だけしかなかったのだ
――――それだけがこんな曖昧な世界ではっきりと感ぜられるモノで、
――――それだけがこの世界で今俺は生きているのだと感じさせて、
――――それを自らの手で叩き潰す時、狂った世界から徐々に脱出していく――――ように感じる。
つまりだ。
俺は、天経を開いた時の記憶は自分の脳のキャビネットに封じ込められた記憶を振り返ることでしか認識できていない。
――――つまり、
天経を開いている間、そのおかしな世界を理解できる別の“俺”が

いるのだ。
ある意味で俺は二重人格者と呼ばれる存在なのかもな。
――――いつの間にか、
――――天経の世界を理解できない俺と、
――――その世界を理解できる完全なる世界の俺、と区分けされた。

――――まともな世界に帰還した時、鼻につくのは血の匂い。
それはどんな時でも変わらない。
――――白銀の日本刀はその惨状を前にしても一切の輝きを失っていない。
「――――――

ガガガガ。お笑いだろう？」
「そりゃあいい。火葬される死体の気持ちを味わえるなんて普通の人間じゃできないことだ」
「一度死ね」
憎悪を込めたレイナーの言葉。
やれやれ、さて、と。
――――――――――――――――――少しまずいかもな。
――――――――――――――――――荒海、どうしている？

・・・・

荒海都視点より　とあるショットガンの闖入者との邂逅

――――――――――――――――――どうすればいい？
珍しく俺は混乱している。
この女、クライアと呼ばれていたがクライア＝アトラスか？
となればこのガキはこいつの兄弟か？
――――――――――――――――――クソ、本当に訳が分からん。
「――――――――――――――――――そこの隻腕のお方」
声をかけられた。
「倉峰遥斗さんの、仲間ですか？」
――――――――――――――――――どう答えるべきか迷う。
こいつは後に倉峰と決闘する相手だ。
――――ここで倉峰を暗殺しに来た、と言われても納得はできる。
だが俺の勘がいっている。
――――そうじゃない。
あの女はあのクソガキに殺意を向けている。だが、その事実が逆に俺の味方であるということには繋がらない。
警戒しながら状況を眺めていると、

――――動き出した。
その女は銃口をガキの方に向けた。
――――決定。
このまま逃げる。
俺は屋上から飛び降りようとする。
ヘルメスと鳳脚のおかげでこの高さでも落ちても全く大丈夫なのだ。
本当、戦うにも逃げるにも便利な脚である。
ここにいるメリットは何一つない。
どうやらデータの抽出も終えたみたいだし。
――――が、
「――――逃がしません」
駆けだした俺の手を引っ張る少女。
勢いがある分そのまま転ぶ。
「何すんだよ！」
半ば悲鳴。どの規模であろうが親子喧嘩に巻き込まれる人間の大半はこう言うだろう。
「潔く巻き込まれて下さい！私ひとりじゃ父さんには勝てない！」
何を勝手なことを、と言おうとした口を閉ざす。
――――――――――――――――――――は？
いやいやいや。
待て。待て。
父さん？
トウサン？
倒産？
そろそろ行数の無駄使いはやめにしようと思考ループを止める――――――――――――――――――――――――――――が。
だがこの女なんといった？
だが、質問する間もなかった。
「――――チッ！」
嬉しそうなアトラス〈父〉がナイフ片手に――――――――畜生、俺に来

やがった。まさに巻き込まれた形になったわけだ。
この女ぁ――――――――――――――――覚えてろよ――――――――――――――――。
また眼前から消えやがった。
今回は粒子状になって消えたのではなく本当に眼前からフッ――――――――――――――――とごく自然に消えた。
――――だが。
後ろに残存していた殺気を見過ごしはしなかった。
そのまま後ろから来るナイフの突きを身を翻して避け、その勢いで頸動脈にナイフを走らせる。
――――少年はそれを受け止めた後流れるような動きで柄にまで受けたナイフを下ろす。
――――俺の指に――――
「うお！」
少年の刃が俺の指を通ろうとした。
瞬時にバックステップをとり事なきを得る。
――――が。
無論、追撃。俺の動脈にナイフが迫る。
だが、
ショットガンの撃鉄音。
――――――――――――――――――――この女も人並みの義理はあったらしいな。
手持ちの2丁のショットガンを少年に撃ち、火線から逃れるようにアルカは俺から離れてくれた。
――――離れたその少年を俺は凝視する。
――――が
また外れ。
少年は粒子状になって消えていた。
「――――そこ」
ガン！

「――――くっ！」
俺から離れ距離をとった少年――――とは見当はずれの場所にショットガンを撃つ少女。
――――だがそこには確かに少年が存在していた。
かろうじて身を側転させたクライア〔父〕は嬉しそうに言う。
「――――やはりクライアにはばれてしまうか」
「そこの人！追撃！」
追撃！じゃねえよ！
荒海は心中、そう吠えていた。
お前は何様だ！人様を巻き込んでいるという罪悪感とか、そういうのが手前の脳細胞の中には皆無なのか？そうなのか！えぇ！
だがすぐに切り替える。これこそが俺の運命なのだ。
――――クソ、仕方がない。
――――乗りかかった、つーか乗せられた船だが、
――――今度こそは外さない。
――――決める。
――――スティレットに持ち替える。
今度こそ。
あのガキの胸に“円錐”を増設する。

タンッ、とステップを踏むように軽い足取りでーーーーだが地を踏みしだくその脚に込める力には一切の妥協もなく――――
その動きは傍から見れば壊れた回転人形――――されどその体幹は地に踏みしだかれた力を下に一つの螺子となる。
その螺子の先は、
スティレットの先端に傾いていく。
渾身の力を込めた荒海の秘技。
それは――――肌を突き抜ける感触と、紅に染まるナイフの軌跡がその所在地を証明した――――かに見えた。

「――――チッ！」
見れば――――
少年の腕に突き刺さったスティレット。
「う――――――――――――――――――――――くはぁぁぁ――――――――――――！」
唸りをあげるヒトそのものの声。
ただしそれは窮地を脱せた歓喜の色も見える
――――何故――――
「――――――――――――――――――――――なるほど。遊びでは、無いようですね」
痛々しげな苦痛に歪む表情の中にも確かな笑みを浮かべて――――
少年は、そんな戯言をその口から吐き出した。
――――だが不可解。
奴は回避行動を起こす暇などなかったはず。
実際奴が動いた形跡もなければ、そもそも俺は奴の心臓部を刺し貫いたはずだ。
――――だが、実際おしゃかになったのは心の臓ではなく左腕だった。
――――ああ、そうか。
まさに苦肉の策。
この行動のお蔭で――――俺はさっきからの不可解なこいつの消失マジックを引き起こしていた能力を理解できた。
だが――――弾き出した結論は、
――――更に俺を混迷の闇に引きずりおろすこととなる。
そいつは――――
「動くな」
と、自分で出した結論を頭にめぐらせようとした瞬間、
――――見慣れた長髪の傭兵が、対物ライフルを手にやってきた。
「――――――――――――――――――――――お前が“キリング・ワイス”の司令官か？」

倉峰は少年に尋ねる。
「ーーー

君に倉峰遥斗君。俺の名前はアヴァロン＝マーズだ」
「名前、自分でつけたろ。手前等“不浄人”に名前などあるもんか。しかもなんだよアヴァロンとマーズって。ついに不浄人の連中にも厨二病発症者が出始めたか」
倉峰が呆れたように突っ込むが向ける殺意は緩ませていない。
ライフルの標準を向けなおす。
ダミ声ホッケーマスク野郎に。
「――――やるかい。
君達の立場を考えても、ここでいたずらに時間をつぶすのも考えものだと思うのだけど」
「得物が潰されたジェイソンと片腕がおしゃかになったクソガキに何ができる。
――――2発、手前等の脳髄にぶちこむだけだ」
「――――ダメです。倉峰遥斗」
驚くほど静かな声がした。
クライア＝アトラスだった。
倉峰もその言葉の本意を理解し、舌打ち交じりに標準を外す。
だが決して警戒を解かず、殺意も緩めず、憎々しげに歪められた目元と口元すら変えることもなく、
「命拾いしたな――――――――――――――――――――――――――――」
とだけ呟いた。
「カラニハルの命を救った手前の娘に免じて今は見逃してやる。――――――――――――――――――――――――さっさと行け」
そうしてアヴァロンとアルカの二人はビルから飛び降りた。
それを見届けて倉峰はクライアに向き直る。「――――――――――――――――カラニハルの件についてはーーーー」
「気にしないでください。元々発端は家のバカ親のせいですから。――――そのことについて情報交換をしたいです。大阪まで案内してくださいませんか」
「分かった。エイミー・ソルジャーズの装甲車を借りよう。

――――レイナーも拾おう。奴はまだあのオフィス内か。
――――まあ、生きてはいるだろう」
あー。そういえばまだあいつは大立ち回り中か。
――――――――――――――――――――スイマセンね。
すっかり忘れてました。
――――だが。
荒海は後にその言葉を撤回する。
――――忘れていたことによる悲劇を垣間見ることになるのだから。
そして確信する。
レイナー・ハスウェルトは嫌味を吐き垂れるゾンビ顔した軍人の皮を被ったーーーー
怪物であると

倉峰遥斗視点より　叫喚絵図

「あー。やっちゃってるなオイ」
阿鼻叫喚、地獄絵図、残虐絵巻物、こんなもんか。
この状況を説明するのに最も適した名詞は。
――――もう、全てが紅だった。
鉄の匂いが嗅覚を支配する。
視覚いっぱいに広がった血は靄となって大気の色すら染め上げている。
むせ返るほどの鉄の匂いと、悠然と佇む鉄仮面。
かなり出来のいいスプラッター映画のワンシーンと言える程のカットだった。
ーーーー血に慣れている荒海でさえ顔面蒼白になっている。
当たり前だ。
これは戦場というより虐殺現場。

――――これがレイナー・ハスウェルトの戦場図。
弾幕で蹴散らし膨張で圧殺し体中の血を搾り取る。
まさに“人間兵器”
陳腐な例えだが歩く圧殺兵器よりもマシだと思え。
そんな圧殺兵器はいつもと変わらず嫌味を吐き垂れる。
「遅いぞ倉峰。こちとら目の表層機関がぶっ壊れているから嗅覚と聴覚だけでこの世界を識っているんだ。毎回毎回この鉄の匂いと重機関の駆動音と断末魔を毎度毎度毎度毎度毎度聞いてりゃねえ、残った五感もぶっ壊れちまう」
「ならその戦闘スタイルの改変を求む」
「ふざけんじゃねえぞ。目が見えないっつってんだろうが。敵の大体の位置しか掴めないからある程度弾丸をばら撒く必要があるんだよ」
どうしろと。俺は心の中で嘆息した。
「まて。あんな危険物を“大体の”なんて曖昧な感覚でぶっ放していたって訳なのか？」
荒海が声を震わせて言う。
「そうだよ」
荒海は頭を抱えレイナーを見ている。
――――どうもこいつは大型火器を恐れている傾向にある。
――――――――――――――――――――まあ、ナイフだしな。
得物。
「レイナー。帰り、装甲車の運転お願い」
「分かった――――――――――――――――――――は、いいんだが」
クライアとカラニハルに向き直る。
「誰」
「――――――――――――――――――――後で話してやるよ。車谷と一緒にな」
・　・
・

・

「これは――――――――――――――――どういうことでしょう」

――――珍しく、車谷が表情を強張らせている。

無理もない。状況が混迷を極めてきたのだ。

さて、車谷に報告した内容は直接的かつ、虚飾、推測なしにありのまま起こったことをただ説明したのみであった。

そんな風に報告した理由はただ一つ。そうでもしないと俺の貧相な脳味噌では二の句が出ないのだ。

まとめましょう、と車谷が１０分の長考の末切り出した。

「まず、事実の確認から」

今回で判明した事実１

――――キリング・ワイスとアトラス家との繋がりが存在していたこと。

だが俺はただの単なる雇用関係だと反論した

そういうと車谷はこう切り返した。

「倉峰。キリング・ワイスについて教えてくれませんか」

「キリング・ワイスは１９５５年に設立された民間軍事会社だ。ベトナム戦争を予期したクラウド＝フォートが設立したもの。その戦争で大儲けした後、ゲリラ部隊の強化を図ってそれが大当たり。

その後も世界中の内紛でその存在が散見されているマンモス傭兵屋企業だ。

――――でいいのか？」

「今の社長は？」

「不明。残念ながら本当に情報が入ってこない。それはキリング・ワイスの運営システムの効果だな」

「システム？」

車谷が興味深そうにそこをぶり返した。

「司令官は雇い主側に用意させるのさ。つまりキリング・ワイスの

傭兵は“傭兵部隊”っていう独立部隊としては行動しない。雇った側の部隊に組み入れられる。そうすることによって情報を漏らさせない。何も知らない下っ端だけを送り込むから、煮ても焼いても何も出てこない。シンプルだが効果的だ。だけど、逆説的に言えばそれだけキリング・ワイスの連中の命の相場は低いってことだな」
車谷は納得したように頷いている。
「つまり、キリング・ワイスの基本方針は“丸投げ”
一度送られたなら、どのような激戦区に送られようとも、捨て駒的扱いを受けようとも、何一つ文句を言われない。
これほどまでに便利な道具はないだろう。
分かったか？むしろ司令官がアトラスだったからこそ、アトラス家が奴らを雇用した何よりの証拠だろう」
「ーーー

――――ですが安心してください。父は普通の４１歳の中年です。
――――あの姿は１８歳の頃です。
――――荒海さんなら、もう分かっているでしょう」
「はぁ、何でーーーー」
荒海は目を見開き、口を噤んだ。
何かを気付いたようだった。
無論何かは分からないが。
「なるほど、そうか」
荒海は納得したようだ。
――――――――――――――――――――なんだ？ものすごく気になるではないか。
「まあ、その話は後にして」
そのことを尋ねようとする前に、車谷が口を開く。
「――――――――――そんなクズ民間会社に誰が傭兵に行くのですか。
だってそうでしょう？
捨て駒前提、トップもわからない得体のしれない会社に行く道理などないでしょうに。
あの膨大な人数の兵士はどこから調達するのですか？」
「――――――――――――――――――――」
車谷の質問はーーーー
まさに核心をつくものだった。
「――――――――――――――――――――――聞いたら」
俺はーーーー
伝えるべきか迷った。
だからこんな戯言を吐いたのだろう。
「――――――――――――――――――――――後悔するぞ」
苦し紛れのとんでもない戯言。
何とも情けない醜態だった。
――――――――――――――――――――――――――俺自体、この情報をこ

の口で語りたくないということか。
クソッタレ。もうそんなもの慣れたつもりでいたのに。
「どうぞ。後悔はし慣れています」
――――覚悟を決めた。
「キリング・ワイスはーーーー」
告発後。
――――青ざめた顔をした、クライアの顔を見た。

・
・
・

車谷謙三視点より　告発後

「それは――――――――――――――――本当ですか」
信じられない。
信じたくもない。
何故なら、もし倉峰の告白が正しいなら、
――――キリング・ワイスはもうただの巨大民間軍事会社ではなく、
――――19世紀に跋扈した腐敗と混沌と荒廃の象徴をいまだ引き継いでいることになります。
クライアが青ざめた顔で告発内容を復唱しました。
「――――――――――スラムから人を攫って兵に仕立て上げている――――――――――――。それはもう奴隷と同じじゃないですか！」
「それだけじゃない。元々ロクでもない生活環境で暮らしていて体が出来上がっていない連中が、重い銃持って戦場で殺し合いができると思うか？」
倉峰の眼は、何の感情も浮かんでではいません。
「――――連中は攫った連中を薬物で強化しているんだ」
「――――えっ」
「前に襲撃した研究所で見つかったのは大量の人間とーーーーステ

ロイド系の薬物やら中枢神経系の刺激性薬物やら、禁則薬物のオンパレードだった。
――――中々笑えない話だろうーーー

ルが同盟を組んでいることとなります。
とんでもないことです。
ですが、まだここまでの大所帯を敵に持ちながら攻撃されてないのは、世界中にここ、大阪の存在が知られているからだです。
首都壊滅後の日本で、変わらず交易を続けている稀有な都市。
その地位を盤石にするために私は世界中の裏社会の勢力をビジネスチャンスを餌に味方に囲い込みました。
いまや、大阪は彼らのアンダーグラウンドマネーを唯一表の金に換金できる都市であり、無くなってしまえば裏社会の最高の公共施設がなくなることになります。
だからこそ、その公共施設が失われないように都市が攻撃されるようなら最大限の協力をするでしょう。
ーーーーーーーーーーーーーーーーだからこそまだ攻撃されずに済んでいるのです。
だが、それでも奴らが力を蓄えていくのをただ眺めているなぞ論外です。
ーーーーーーーーーーーーーーーーだからこそ、このデータの中身は重要になってきます。
「で、だ」
倉峰はアトラスに目を向けます。
「アンタはこれからどうするつもりだ」
「決まっている。アトラス家からの決別だ」
クライアは怒りで興奮した口調でそう言いました。
ーーーーーーーーーーーーーーーー

「無論です。あなた方がキリング・ワイスの壊滅を目指してくれるのならば私は協力を惜しみません」
そこで倉峰は、何かを思いついたかのような顔をしました。
「じゃあ、荒海のオフィスの方に行ってくれあんたは荒海のボディーガードをしてもらう」
「おい待て。なんで」
「荒海、お前の能力は認めているが、戦場の只中では不安定だ。
――――その点、お前とクライアの能力は相性がいい。どの空間座標からも視点を移動させる能力。多角攻撃に弱いお前にはぴったりだと思うのだが」

荒海都視点　移る

奴の意見は業腹ながら聞き入れざるを得ない。
所詮俺の武装はナイフ一本であり、四方から弾幕を張られてしまったら立派な蜂の巣の出来上がり。
それを考えればなるほど。クライアとは抜群に相性がいいだろう。
一方の視点しか持たずイナゴのように飛びかかるしか脳の無い俺の戦闘スタイルでも、広範囲の視点を持っているクライアと組めば、多少なりとも範囲戦でも有利に事を運べる。
――――と、理由を用意したならばそれっぽく納得のできる説明にも聞こえるが、そもそも俺は弾幕蠢く戦場の住人でもなければ、暗殺稼業を生業にした人間であって決してこの前のようなドンパチ場に居座るべき人間ではないということを特筆しておかねばならない。
つまり、この女の戦闘力が必要な戦場なぞ、俺にとって似つかわしくもない場違いな居場所なのである。
つまり、

言いたいことは一つだ。

派手なドンパチは余所でやれ。

「どうかな、荒海」

そうして俺は、

先程脳内で再生していた文句の数々を簡潔に簡潔に、だがただただ怨嗟と憤怒をその分込めて、吐き散らした。

「それだけ俺の戦闘スタイルを理解していながらどうしてあんなドンパチ場に俺を送ったんだよ！」

「いいじゃないか。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー冗談抜きで、今度からそう言う戦場が多くなる。慣れておかなければいけないからな」

そう倉峰がいう。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー俺、貧乏クジ引いたかもしれん。

そう苦々しくも俺は思うのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーークライアは不思議そうな顔で俺を見ている。

・　・　・

逃げ込んだ先に何があるでしょう？

無論、人それぞれでしょうね。

世に蔓延る理不尽から逃れようと闇から一縷の光を手に取ろうとする人達。

彼らは良くも悪くも前を向いていて、その遠い光が彼らの活力となり、苦しみながら、もがきながらも必死に生きる生の一兵卒となりこの世を謳歌していくのでしょう。

ーーーーーですが

光から逃げ、闇に身を隠し、諦観と懊悩の感情の中で生きている人間もまた、確実にこの世に存在することを特筆しておかねばならな

い。
手にした光を持たざる者に疎まれ憎まれ、自らの手で放棄せざるを得なかった者。
そういった人間の末路はなんなのでしょう？
なまじ光を手にしてしまったが故にそれに向かう事も出来ず、闇の中で生きる事しか選択できず、心を凍らせ闇を見つめ、遂には全ての感情を放棄せざるを得なくなる。
それがーーーー倉峰遥斗という人物だった。

古屋雄也視点より　来店

失くしたものは見つけ出せ。
その手段はわが事務所にあります。
貴方のご来店、お待ちしております。

キャッチコピー、へったくそだなぁ、と他人事のように思う。
まあ別に本当に探偵業で食っていこうなぞという戯けた空想は描いてなぞいないから別にいいのだが。
酷い話だが、探偵崩れ、なぞと世間で冷笑と嘲笑を受けている自分の方が本業一筋で頑張っている連中より遥かに儲けが出ている。
結局本業の十倍の金を俺にもたらしてくれるのは情報屋、なぞという二世紀ほど前に廃れているはずの職種だ。
むべなるかな。アメリカの禁酒法と同じ理論だ。禁止された酒を求めて裏街道の怪しい酒場の暖簾に手をかける方々。違法性が高まれば高まるほど需要というのは比例して高くなるものなのだよ。

科学技術の発達と共に遥か深い深淵に叩き込まれた様々な“情報”。
どのような些細な情報であれ、知るためには深淵の深みに嵌って溺れ死ぬ覚悟というものが必要になってきた。
だからその深淵にスキューバダイビングが如く突貫して、お望みの情報を深淵から引きずり出す俺のような職種がやってきたのだ。
その深淵は司法の連中ですら手に余るシロモノで、奴らも潜るための道具は持っているようだが、それを扱う技術は三流もいいところだ。なのでこの手の仕事は時に、公安関係の連中すらご贔屓にさせて貰ったりしている。
――――だが、東京のラズウェル事件後の雲行きから、何をどう考えても神奈川の裏街道にそのまま暖簾を掛けたままならば濁り水の人でなし共の残酷ビックリ八つ裂きショーが穏やかに進行していただろう。そうして事務書と暖簾と少しばかりの罠用のＣ４を置いて中国まで逃げてきたのだ。
――――そんなことを振り返りながら、逃亡先の中国でブラブラしていると、
――――美しい陶器のような、純白の腕が、
――――俺の頚骨に見事なアッパーカットを喰らわせたのが見えた。

「――――はい。攫った目的は何？」
「――――――

誘拐には必ず目的となる利潤があり、その為に破滅のリスクを背負って鉄の意志で実行するのだ。
――――でだ、
何故、その目的をいつまでも話さないんだ？
笑い話だ。頚骨に拳をめり込ませ廃工場までズタ袋を背負って運んだ挙句、目的を話さぬまましどろもどろになっている。
――――空しくなってきた。
――――空しさは腹立たしさに代替してきた。
いつの間にか俺は、誘拐された自分の状況をすっかり忘れて、キレた。
「お前は何のために俺を攫ったんだよ！なんだったんだこの時間は！この無駄な時間を返せ！」
もう半ば悲鳴だ。
――――――――――――――――――――知らなかった。目的を明かさない誘拐犯もまた、これほど困るものなのだな。
「あ――――――――――――――――あの」
もしかしたら大金を出せ、なぞという俺にとっては一瞬で死を宣告されると同等の言葉が紡がれるかもしれないのに、不思議と安堵していた。
「――――――――――――――――人を――――――――――――――――探しています」
たどたどしい口調で、こう切り出した。
「倉峰遥斗――――――――――――――――という名前です。ご存じ――――――――――――――――ありませんか」

倉峰遥斗視点より　日常回帰

結局、データの解析には一週間の時を要するとのことだった。
勢力図の動きもなく、一時的に日常に回帰できた。
基本的にこの大阪での裁断者としての役割はエイミー・ソルジャーズに一任しているため外回りばかりの俺はいきなり帰ってきてもあまり居場所はないのである。
ーーーーーーーーーの、はず、なんだが。
電話。
「もしもし。倉峰です」
「マスターですか。少し問題がーーーーーーーーー

大口径ライフルでお互いの車のエンジンを吹き飛ばし、ニコリと笑って出て行ったからである。
その大口径ライフルの弾丸の先端には、特殊な炸薬が仕込まれており、内部のエンジンが無論の如く発火し爆発し、大阪町民が歓喜の声が上がった。
――――こうして倉峰の日常は過ぎていく。

目録2（後書き）

本当に申し訳がありません――――――。
読みにくくて――――――――。

今日のＴｏｐｉｃ！！～大阪治安維持団体からのお知らせ～

大阪治安維持団体サファオルのお知らせをお受け取りください

さて、久方ぶりです市民の皆様。今日も大阪支配者車谷謙三の奴隷としてあくせくお働きになっていると思われます。
さて、皆様のお粗末極まりない三時欲求から犯罪願望を取り除くべく、我々はＨ＆ＫとＡＫを手によりいっそう皆様方の恐怖の対象となるべく、銃把を握ってこの義務に勤しむ所存でございます。

さてさて、最近どこぞの自殺志願者の方々が我々にナイフを突き出し突っ込んでいくという哀れなゲームの流行の兆しがあるようですが、５．５６ミリの弾雨を受けて蜂の巣の形になって死んでいきたいなぞという変態じみた嗜好の持ち主以外にはお勧めいたしません。生命保険はおりることはありませんし、ご遺体はゴミともども焼却炉へレッツゴーでありますし、残された家族の方には焼却費といくばくかの慰謝料が発生したします。

それでも、という覚悟をもっていただければ、止めは致しません。我々はただ数発の弾丸を消費するだけで家族から慰謝料がふんだくれるわけですからはっきりいってボロイ商売であります。家族が嫌いな方は案外オススメな自殺方法かもしれません。

ですが、大阪府民として、大阪の機関の手を煩わせたくないという殊勝な考えを欠片でも持っているならば、城壁の外で奇声をあげて数分待っていましょう。誰もが迷惑をこうむることがないハッピーな死にざまが演出されます。
あなたの死体を片付けるのも、あなた方が払っている税金で賄われ

ています。そのことに自覚をもって、死ぬ時ぐらい誰にも迷惑がかからないように致したほうがよろしいと思われます。

以上、サファオルからでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2845z/

---

sky blood

2011年12月29日16時47分発行